ゆるホロの日常。

窓風

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゆる～くホロメンと日常を過ごしてみたくない？

……っていう私自身の妄想まみれのモノになります。

解釈違いやキャラ崩壊等はお気をつけください。あと登場するホロメンの紹介は読者がホロメンにある程度詳しいと見込んでサクッとだけします。気になるホロメンがいたらＴｗｉｔｔｅｒやＹｏｕＴｕｂｅで探してみてください。

百合は上手く書けるかわからんけど頑張る。

Ｒ―１５はおそらく清楚（）系の人達のせいということで保険。

ちなみに作者はホロプロ箱推しです。

目次

設定集
設定集（たまに更新するかも）
1
大体こんな日常。
大体こんな日常。1 ―― 4
大体こんな日常。2 ―― 11
大体こんな日常。3 ―― 19
武術王決定戦
恒例行事 ―― 29
強化期間 ―― 38
開会式 ―― 46
予選Ｉブロック ―― 56
決勝トーナメント ―― 68
ｖｓ輝竜 ―― 77
白と黒 ―― 87
ｖｓ白魔 ―― 97
ゆるっとダイアリー
お前のハロウィン何味？ ―― 105
楽しい想い出と心地良い目覚めを 118
とまらない、こえていく、つながる。 131
ヒロインオーディション（体験版） 134
邂逅

設定集

設定集（たまに更新するかも）

◇世界観

基本的にちょっとだけ未来的な、たまに魔法とかも飛び交う現代日本が舞台。数十年程前から地球全体を魔法陣のようなものが通過し、エルフや獣人、天使や魔人などの異世界人と呼ばれる人達が現れるようになった。魔法陣のせいか地球に元いた人間や異世界人全員に（ご都合）認識阻害がかけられたが、今までの生活などに支障がないようにされている。ただ本編ではほとんど触れられない。

◇オリジナルキャラクター

○愛川　杏（あいかわ　きょう）

本作のオリジナル主人公。高校進学を機に地方都市のアパートの一室を借りて生活をしている高校生。近くのコンビニでバイトをしており、同じ学校の生徒も数人バイト

しているようだ。中学までは剣道部で強さはそれなり。高校ではバイトのため部活には入っていないが、たまに友人の頼みで手伝うときがある。元々ゲームは好きだが、高校に入ってすぐにアニメ、ゲームにどハマりをしてからは友達がよく部屋に遊びに来るようになった。たまにボケるが周りのボケが多すぎてツッコミに回ることもままある。（どこかで聞いたな。）将来の目標とかは特にないため、とりあえずゆるく過ごしている。実は中学3年までに失恋を4回経験している。スンスン。

○蒼葉　誠（あおば　まこと）

オリジナルキャラ。杏の親友であり再従兄弟で、幼少期から杏とはたまに遊んだりしていた。根は真面目だけど、変態っていうほど変態じゃないかもしれないけど基本変態。こいつには色々ボケ倒してもらいたい。杏にもちゃんと男友達おるんやでって言いたいから他のオリキャラより登場頻度は高いかも。

○他のオリキャラ

色んなところにちょいちょい出てくる。名前考えるの楽しい。

◇ホロメン

ホロメンは作者の妄想と偏見で大体この辺かな？ってとこで決めました。なんとなく下記のように配役の予定だけど「ホロメン同士の名前の呼び方を崩したくない」って後で気づいて、中学時代の序列（1期生、2期生等）で先輩だけど後輩、後輩だけど先

輩っていうちょっと難しい要素ができた。これはすんません。

○社会人他

ロボ子、ＡＺＫｉ、ちょこ、マリン、ラミィ、ぼたん

○大学生

おかゆ、ころね、ノエル、フレア

○高校３年

かなた、ココ、わため、トワ、ルーナ

○高校２年

フブキ、まつり、アキ、メル、そら、友人Ａ、すいせい、あやめ、ミオ、みこ、ぺこら

○高校１年

はあと、スバル、シオン、あくあ、るしあ、ねね、ポルカ

ＥＮやＩＤ、ホロスターズメンバーも出せていけたらいいなぁ……

大体こんな日常。
大体こんな日常。1

ジリジリジリジリジリ……

携帯から朝を知らせる目覚ましが鳴る。布団の中から手を伸ばしてアラームを止めて、布団を蹴りながら伸びをして身体と脳を起こす。

「～～～～っ、くぁ。」

目一杯伸びたらガバッと一気に体を起こし、ベッドから降りて朝食の準備をする。といっても朝に予約炊飯をした白米と冷蔵庫から出した納豆で作れる納豆ご飯なんだが。おかずはない。

最後の納豆をかき込み、洗面所で顔を洗って歯を磨く。制服に着替えて……

おっ、今日は早いな。いつもより少し早いタイミングで迎えが来たようだ。

「少々お待ち～」

教科書やノートなどの勉強道具が入った鞄を持って玄関を出る。外にはいつもの白髪と黒髪が俺を待っていた。

「おはよう、フブキ、ミオ。」
「おはよう。」
「おっはよー！」
「今日は俺の負けだな。」
「はーい愛川君わたしとミオにジュース1本ずつー！」
「じゃあ昼休みにな。」
「わぁーい♪」
　白髪の子は白上フブキ。猫のように見えるが狐だ。「にゃー！」とか猫っぽくなるときがあるため本当は猫かもしれないが狐だ。
「もう、別にウチはいいのに。」
「じゃあタイガへのちゅ～るもつけよう。この前のから揚げのお礼だ。」
「うっ……ではお言葉に甘えて。」
　そんで黒髪の子が大神ミオ。狼だけど大神。料理が上手でフブキが甘えるくらいには面倒見がとてもいい。なんならママなんじゃないかと錯覚する。ちなみにタイガはミオの飼い猫だ。デケェ。
　2人とも高校に入ってからの友達で、当時フブキは同じクラスでゲームやアニメの布教元、ミオはフブキの友達＆同じアパートという経緯があり、こうして仲良くしても

らっている。
あ、自己紹介がまだだな。愛川杏（あいかわきょう）だ。少し田舎の地元から高校進学を機にこの地方都市にアパートの1室を借りて住んでいる。ケモミミが好き（主にフブキに布教されたモノのせい）ってこと以外に特に語ることはないよ。
まぁ大体いつもこんな感じで3人で登校をする。ただしフブミオを崩さないように俺は車道側を歩く。百合には割り込まぬ。
そしてあのアニメがどーだ、このゲームがこーだなど他愛ない話をしながら歩くこと15分。
「やだぁ！行かないでミオーー!!」
「はいはい。じゃあ愛川君またね。」
「あいよ。」
「うわぁぁぁぁぁ!!」
学校に着き、ミオは違うクラスなのでここで別れる。その度にフブキがほぼ毎度「ミオーーー!!」と寂しがるので、宥めながら俺たちの教室に入る。
「おーす。」
「おはよー！」
「おー。毎度毎度飽きないねおたくら。」

「ここまでがテンプレ。」

窓側の最前列の席が今の俺の席だ。その後ろの席から聞こえた呆れたような声の主は蒼葉誠。昔馴染みの俺の再従兄弟で高校から同じ学校になった。勉強もできる、顔も悪くない比較的好青年だと思う。ただちょっとキマるとヤバい。

「おうなんか失礼なこと考えてんな？」

「思考を読むな気のせいだ。」

「おっはよー!!」

いつもの元気な声が聞こえて廊下のほうを見ればクラスの元気の源のサイドテールがやってきた。

「おーすまつり。」

「よぉー。」

「杏君、誠君おはyフブキーーーーーーーーーーーーーーーーーー!!!!!!!!!!」

「にゃぁぁぁぁ!?!?!?」

急に暴走したサイドテールが夏色まつり。誰とでも気軽に話せるコミュ力超人。フブキとは同じ中学らしく今年同じクラスになってから週に1回はあんな感じになる。そんでフブキが猫になる。2人とも相当仲が良いため見てるこっちもニヤけてしまう。

「まつりちゃん!?びっくりしたぁ……」

「いひひー。やったぁ。」
あぁ、やっぱ良いわこれ……浄化される……夏色吹雪てぇてぇ。

◇◇◇

午前中の授業を消化して今は昼休み。学校の近くにあるコンビニに走る者。食堂でゆったりする者。自前の弁当を食する者。各々自由に昼食をとる。ちなみに俺は購買の弁当派。朝の約束のためにフブキと購買館の前で待つこと数分、ミオと頭に2本の角がある鬼人が来た。

鬼人の名前は百鬼あやめ。正真正銘鬼だがその本性は可愛いの具現化と言えるくらい可愛いが溢れている。そこにミオが加わることによって母娘(おやこ)かと思うくらい尊い光景が見られる。かわ余が過ぎる。ちなみにミオと同じクラスなのでそのクラスはその光景に悶絶する生徒が多数だとか。

「想定内で予定外の鬼がおるな?」
「ジュースがもらえると聞いて来ました!」
「まぁいいんだけど。」
フブキにお茶、ミオに紅茶、あやめにちょっといいお茶を奢り、俺の昼飯も買って校

内のテラスに移動して昼食をとる。あやめは意図的にちょっといいの選んだな？いいけど。
「ふわ～ぁ。お茶うまぁ。」
「あやめの分までありがとね。」
「いいよいいよ。」
「余～♪」
うーん可愛い。飯もうまい。最高のランチや。これがあれば午後も頑張れる。同じクラスの奴らが羨ましい。
「なーに1人で楽しんでんだコラ。」
「おー誠。」
「おーじゃねぇ混ぜろ。教室に1人は寂しいんだよ。」
「ん〝ん〝っ」
「……フブキ？」
誠は俺以外に飯を共にする友達がいないらしい。仕方ない、この癒し空間を分けてやるとするか。んでフブキはなに悶えてんの？
「だーれがぼっちだ1人が好きなだけだ」
「寂しいんじゃねぇのか」

「寂しいよ」
「わかったとりあえず座って食え。」
「ん。」
　会話に埒があかないと判断して誠を空いてる席につかせる。ずっと頭の上でうるさくされてもしゃーない。しておい白上?突っ伏してどうした?なんだその親指の「イイね!」は。
「」
「いや聴き取れん。」

大体こんな日常。2

あやめの笑顔で元気を補充して午後の授業を終えて帰る用意を済ませる。今日はこの後バイトが控えているのだ。そのため部活には入っていない。

「あら、愛川様。これからバイトかしら?」

「ゆ、癒月先生。」

バイトまで少し時間があるため、校舎2階の廊下からグラウンドでアップを始める野球部やサッカー部を見下ろしていると背後から艶かしい声で呼ばれた。

悪魔の保険医、癒月ちょこ。白衣に身を包むも抑えきれない豊満な胸。常に谷間が見えてしまうもんで先生と話す生徒は男女問わず視線が泳ぐ。とても、エッチです……。

ちなみに保険医なのに化学部の顧問でもある。

「もう、ちょこって呼んでって言ってるのに。」

「いえ、先生にそんな……」

「うふふ♡可愛いわねぇ。」
　会うと大体こんな感じで先生のペースに呑まれてしまう。俺の身長の関係もあって女性の中だと割と高身長な先生が上目遣いで話してくるのだ。ＤＴにはキチィ。そして先生と話してると必ずと言っていいほど来る奴がいるんだよな……。早いとこ退散したいが。
「ねえええええええ!!杏またちょこ先生とイチャついてる!!」
　はい残念、間に合わず。背後から制服に身を包む銀髪の魔法使い、紫咲シオンが喚く。１コ下の後輩なのだがいかんせん生意気。クソガキという言葉が似合うクソガキ。最初に会った時は中学生かと思ったくらいには小さい。え?１４５ｃｍ?あー……。
（癒月先生と見比べながら）
「誰が小さいって!?」
「おめーも思考を読むな!てか声がデケェ!また変な噂がたつからやめろ!」
「うっさい!杏のバカあああ!!!」
「ぐほぉっ!?!?!!」
「あ、そーだちょこ先生。部活でこれからまた合成しようと思うんだけど監督お願いできる?」
「いいわよ。それじゃあね愛川様。」

「べーーっだ!!」

魔法で加速されたドロップキックをモロに腹にくらって廊下で悶え苦しむ。そんな俺をフン、と鼻で笑うシオンは俺を無視して癒月先生と部活に行ってしまった。真面目なんだかクソガキなんだか……。

「くおぉぉぉあぉぉぉ……!!!!」

キックの瞬間薄紫のパンツが見えたことは黙っておこう。

◇◇◇

シオンのキックで苦しむこと10分。よろめきながらも下駄箱までたどり着いた。普通の人間に魔法で加速されたドロップキックはアカンて……。なんで内臓生きてんの俺。

「すいちゃんはーー?」

「今日も可愛いーー!!」

またしても背後から声をかけられ、脊髄反射で返事をして振り返る。まつりと同じような青髪のサイドテールをした星街すいせいがそこにいた。歌がとても上手くて憧れの存在でもある。会ってから3日で定着した先程の挨拶はもはや骨の髄にまで浸透さ

れており、ある種の催眠なのではと最近思い始めた。ちなみにちょっと前に「今日も小さーい」と言った誠がすいちゃんに連れてかれて3時間ほど帰って来なかったことがある。

「どしたの？腹痛？」

「クソガキに魔法付与したドロップキックくらった。」

「どういうこと？」

「わからんくていい。俺もよくわからん。」

「そ、そう。そういえば今日シフト一緒だったよね？一緒に行こうよ！」

「おう。けどあと2分待って。」

すいちゃんとはバイト先が同じなのでシフトが同じ日だったりするとよく一緒に出勤している。実は初対面もバイト先だったので同じ学校の同学年だとは思わなかった。あと1コ下で同じ学校の後輩もいるのだが、それはまた今度。

住んでるアパートから学校に対して真反対にバイト先のコンビニがあるため、普段は俺の部屋に学校鞄を置いてからバイトに行っている。今日はドロップキックのせいで余裕がなくなったため割愛して直行。

てなわけですいちゃんとバイト先のコンビニに到着。コンビニの制服に着替えてバイト開始。今日はすいちゃんがレジ、俺がバックヤードで作業だ。

「「おはようございまーす。」」
「おはようございますぅ～。」
　パートの宝鐘マリンさんに挨拶してそれぞれ持ち場につく。さて、まずは床のモップがけだな。その後は品出しして、あとウォークインの補充と……
「ちょっと紹介軽すぎないかなぁ!?」
「え、なんですか宝鐘さん。」
「他のメンバーは多少説明してんのになんで私だけそんな軽いのかなぁぁ!?」
「ちょ、メタいです。」
　目に見えない何かを読んで癇癪を起こす宝鐘マリンさん。行動や言動にどこか色気と昭和みを感じるパートさん。自分の船を持つことが夢だそうだが、親が漁師なのだろうか?まぁ深く考えないようにしよう。
「偏見混ざってません?」
「そりゃあそうですよ。俺の偏見です。」
「……まぁよしとしましょう。」
　そう言って宝鐘さんは発注タブレットを持って作業に戻っていった。思考を読むのは誠とシオンだけで精一杯だからこれ以上増えないでもらいたい。
「あ、そこはご心配なく。今回きりですので。」

「だから」

◇◇◇

4時間後。

「「お先に失礼しまーす。」」

「うん、お疲れさまー。」

深夜勤務の猫又おかゆさんと交代してバイトの時間が終わる。おかゆさんは猫の擬人化と言ってもいいぐらいマイペースなヒトだ。そんでダウナー、絶妙な低音ボイスときた。これはもうまんま猫なんよ。あとボクっ娘。推せる。

「にゃお～ん。」

「ありがとうございます！」

おかゆさんのサービスをいただいた。これで明日も生きていける。だからすいちゃんそんな目で俺をミナイデ。

すいちゃんのジト目を浴びながらも雑談を交わしながら帰路につく。夜9時過ぎともなれば女の子1人だけ歩かせるわけにもいかないので、今日みたいな日はすいちゃん

を家まで送ってから帰るようにしている。そしてコンビニから歩いておよそ10分、星街家に到着。
「送ってくれてありがと。」
「おう、じゃあお疲れ。」
すいちゃんを家に送ったので俺も自分の家の方向に歩みを進める。後ろから「すいちゃんおかえりー!」と大きな声が玄関から漏れている。すいちゃんの姉ちゃんだな。変わらず元気そうだ。
星街家をあとにして晩飯どうするかなとか考えてたら自分の部屋まで帰ってきた。鍵を開けようとしたところで、上の階から誰が降りてきたようだ。
「あ、バイトお疲れ様。ちょうど良かった。」
「ミオ。」
「晩ご飯まだでしょ?これ、良かったらどうぞ。」
白地の部屋着を着たミオからタッパーを受け取った。中にはほんのり温かい肉じゃがが入っていた。これは……。
「ちょっと、作りすぎちゃって……。」
アハハ、と頬を指でかきながら笑うミオ。顔が赤くなってるように見えるのは風呂上がりだからだろうか。

「ありがとなミオ。ご馳走になります。」
「う、うん！じゃあ、おやすみ！」
「あぁ、おやすみ。」
　1日の終わりの挨拶を交わすとパタパタとミオは自分の部屋に戻っていった。ミオからご飯のお裾分けをもらうのはこれで何度目だったか。それもほぼ毎回バイトがある日なのでもうこれは……いや、変な憶測はよそう。ラブコメの主人公じゃあるまいし。
　鍵を開けて部屋に入り、制服を脱ぎ捨て風呂に入る。風呂から上がって制服をハンガーにかけ、炊飯器に残ってる米をよそってレンジでチン。温まった米とミオの肉じゃがが今日の晩飯だ。
「いただきます。」
　肉じゃがはとても美味しくいただきました。

大体こんな日常。３

今週の土曜日はバイトもなし。こんな日は昼近くまでダラダラ寝ていたいよな。脳が起きてからかれこれ２時間は過ぎている。布団はとても恐ろしい生き物よ。しかし夕方にはフブキと誠が来るし適当に買い物に行っておきたい。そんでせっかくスーパーまで行くならあそこのラーメンを食べたい。決まりだ。

「よっし！買い物じゃ！」

顔を洗い歯を磨き、サッと私服に着替えて財布が入ったショルダーバッグを持ち外に出る。天気は良好、気温も問題なし。そんじゃ買い物にレッツゴー。あとタイガのちゅ～るも買わんとな。

自転車で走ること１５分。大きい通りに面したそこそこの大きさのスーパー……の裏の路地の一角にあるラーメン屋。去年の買い物帰りにふと見つけたこのラーメン屋は、達筆な白字で『麺屋　ぼたん』と書かれた赤い暖簾がかかっており、店内に入ると質素な店内と美人店主が客を迎える。

「いらっしゃい。お、君か。」
「どもです。」
　店主の獅白ぼたんさん。集中しているときの眼光は百獣の王そのもの。しかし普段は意外とゆるい感じの気のいい姉御だ。見え隠れするクールな雰囲気がとてもたまらない。余裕のある大人の女性。
「いいタイミングで来たね。ちょうど新作を作ってるとこだったんだ。試しに食べてみてくれない？」
「新作ですか。どんな感じなんです？」
「羊の骨から出汁を取ったスープとチャーシューの代わりに薄いラム肉を合わせたラムラーメン！味見はまだしてない。」
「してもろて。」
　カッカッカッと笑いながら茹でた麺を湯切りする獅白さん。湯切りした麺をスープが入ってる丼に投入し、ネギとメンマ、海苔、チャーシュー風のラム肉を盛り付けていく。何度見てもいい手際だ。
「そうそう、ラミちゃんはどう？うるさくない？」
　ラミちゃんというのは雪花ラミィさんのことだ。実は同じアパートの２つ隣の部屋に住んでいるＯＬのハーフエルフで、水色のロングヘアはとても美しい。酒（特に日本

酒）が好きで部屋からは「おしゃけ～」や「ししろ～ん」など聞こえてくるため、なんかふわふわした印象を持っている。獅白さんがたまに遊びに来ていて、その度に（主にホラーゲームで）とてもいい悲鳴をいただいております。

「いえ、全然気にしてないですよ。むしろ愉快で聞いてて楽しいです。」

「ならよかった。はいよ、試作羊1号お待ち。」

「名前変わってません？」

出されたラーメンから漂うとても香ばしい匂いが鼻腔をくすぐる。とても食欲をそそられる。

「空きっ腹に効くでしょ？」

「えぇ、とても。ではいただきます。」

箸を取り手を合わせて合掌。すべてのわためぇに感謝を込めて。

「なんか寒気するぅ！」

◇◇◇

獅白さんのラムラーメンはとてもおいしくいただきました。スープまで全部美味かったので丼は空にしてきました。おかげで少し喉が渇いてます。美味しいラーメンを食べた今は、本来の目的である買い物をしている。と言っても主にお菓子類だが。

「ポテチは大きいの1つ、あとチョコレート系を……」

「あとワタシにも1つ頼むよ～。」

菓子入れにしている引き出しに入ってた物を思い出しながらカゴにお菓子を入れていると、背後から若干カタコトな言葉で追加注文された。振り向くと俺よりも高い目線（といっても5，6ｃｍくらいしか変わらないが）から見下ろすドラゴンが仁王立ちで立っていた。

「あまり高いのにしないでくださいよ？ココさん。」

「わーかってるって！」

同じ学校の1コ上の先輩、桐生ココ。聞くところによると身長１８０ｃｍ、Ｐカップ。これでも気合いで人型を保っている状態らしい。知り合いにデカイ人がいるけどいや充分デケェ。ジャージ越しでもわかる。日本語はカタコトだが物騒な言動もあるため、一部では極道のモンじゃないかとまで噂が立っている。今までドスとかチャカとか見

た気がするけど気のせいですよね（震え声）。
「いたいた。デカイくせにすぐいなくなるんだからココは。」
「おめーが小せぇんだろかなた。」
　ココさんの後ろから頭に手裏け……天使の輪を浮かべた小柄な（ココさんと並ぶとより一層小柄に見える）天使が買い物カゴを持って現れる。ココさんと同学年であり生徒会役員でもある天使の名は天音かなた。ココさんや他数名の同学年と特に仲が良く、見た目によらず握力は５０ｋｇもあるのだとか。たまに悪そうな顔も目撃されるため、天使ではなく悪魔かゴリラなのではないかという噂もある。
「愛川君もココに甘すぎ！」
「じゃあかなたさんにも何か奢りますよ。」
「あ、じゃあこれを……って違ーう！」
「オイオイオイオイ、可愛い後輩君がワタシらに尽くしてくれるって言ってるのにそれを断るのかァ？」
「言い方！それよりも買うもの全部入れたから会計すんぞ！」
　学校でもよく繰り広げられるかなココ（オフｖｅｒ．）を眺めていると、かなたさんの持つカゴに鰹節やタコ足が入ってることに気づいた。
「お、タコパでもやるんですか？」

「おうよ。ワタシん家でな。お前も来るか？」
「残念ながら、俺もこの後友達が遊びに来るんで。また今度やりましょう。」
「ココ置いてくぞー！」
「わーかったよ！じゃ、また会おうぜ舎弟。」
「はい、また。」
　互いに拳をぶつけ、ココさんはかなたさんを追ってレジの待機列に消えていった。今度は是非タコパに参加したい。
　ドリンクコーナーに行き追加で２Ｌのジュースと５００ｍＬのコーラをカゴに入れ、アイスのコーナーに向かった。

◇◇◇

「なんでもう部屋にいんのかね？」
「おーっす。」
「お邪魔してまーす！」
　買い物から帰ってくると部屋の鍵は空いていて、中からゲームを楽しむ男女の声が聞

こえた。ドアを開けてみれば、誠とフブキが大乱闘していた。人のゲームをまぁ勝手に……。

「これはフブキのだ。お前のはなんもしてない。」

「持ち込んじゃったぜぇ！」

「いや別にいいんだけどさ。」

テンションが上がっているフブキを見つつ、買い物袋からお菓子やらアイスやらを引き出しや冷蔵庫にぶち込む。米は買い物に行く前に予約炊飯したから……よし、炊けてる。

「あ、来たときにはもう炊けてたから混ぜといたぞ。」

「お、サンキュー。」

炊けた米を確認して、２階のミオの部屋に行く。インターホンを鳴らすと部屋からパタパタと足音が聞こえ、ドアから髪を後ろで縛ったエプロン姿のミオが出てきた。

「よ。」

「愛川君！ちょうどよかった。お願いがあるんだけどいいかな？」

「おーけー。」

ミオの部屋に上がると、女の子の部屋らしいいい香りと飼い猫のタイガが俺を出迎えた。いつも「よぉタイガ。」と声をかけると短く鳴いて返事が返ってくるのは気のせいだ

ろう。てかタイガはホント何回見てもデカイな。キッチンには鍋が温められており、今日の晩御飯であるすき焼きがその中に詰まっていた。
「お、これはまた美味そうだな。」
「そうでしょー。味見はまだなんだけど。」
「いやしてもろて。」
「嘘だって。」
「じゃあこれ持ってけばいいな？」
「うん、お願いしていい？」
「任せろ。」
　クスクス笑うミオとそんなやり取りをして、鍋を俺の部屋まで運ぶ。両手が塞がっているため、ミオにドアを開けてもらう。
「テーブルの上にあるのよけてくれー。」
「鍋敷き置いとくね。」
「お、サンキュー。」
　誠がテーブルの上の物をどかしてフブキが鍋敷きを置き、その上に鍋を置く。そして食器棚から人数分の皿と箸を出す。
「えーと、1、2、3、4、5……5？」

「お邪魔しまーす！」
「確かに４人にしては量多いなとは思ったけど、お前かまつり……」
「フブキと誠君から聞いて急遽参加しようと思ったの！」
「ミオは？」
「まつりちゃんが来ること聞いてるよー。」
「俺に連絡が来てないんだが？」
　みんなで目を合わせて。
「「「……ドッキリ的な？」」」
「（ため息）……まぁいいわ。ゆっくりしてけな。」
　いぇーい！と夏色吹雪でハイタッチをする。頼むから連絡網に俺の名前を追加してくれ。
「じゃあトータル５人な。まつり、冷蔵庫から卵５個取ってくれ。」
「えー、まつりお客さんだよー？」
「働かざるもの」
「わかったよ、冗談だってー。」
　まつりは笑いながら冷蔵庫から卵を取り出し、並べたそれぞれの取り皿に置いていく。その間にフブキがご飯を盛ってくれていた。助かるラスカル。唐突な追加メン

バーだったが、これで晩御飯の用意が完了した。５人でテーブルに囲み、鍋の蓋を開ける。白い湯気とともに肉や野菜、椎茸などが姿を現し、一同の目はキラキラしている。
「じゃ、食べますか！」
「だな。」
「それでは手を合わせて、」
「「「「いただきます!!」」」」

ご飯の後はゲーム大会が行われ、レディースはミオの部屋、野郎は俺の部屋で夜を明かした。

「そういやどうやって俺の部屋に入った？鍵かかってたよな？」
「通りすがりの天才魔法使いが魔法で開けてくれた。」
「あいつ……」

武術王決定戦
恒例行事

5月の半ば、放課後のグラウンドにて俺はサッカー部の手伝いに来ていた。手伝いといっても用具整理程度だけど。

「やってるな。」

「お、焔か。」

近づいてきた男は紅山焔(べにやまほむら)。同学年でサッカー部のエースストライカーだ。クールでありながら心は熱い男として大変人気がある。中学では全国大会優勝も経験しているとか。

「堅は?」

「あそこだ。」

「よしこーい!」と元気な声を上げるゴールキーパーは橙坂堅(とうさかけん)。こっちは見るからに熱血漢。焔と幼馴染で共にサッカーを続けてきた仲だそうだ。焔同様、全国大会優勝を経

験している。
「まだやるんだ……学校閉まるまでやるつもりか？」
「あいつはそういう奴だからな。」
「とかいいつつお前もまだやるんだろ？」
「バレたか。」
　何度も来るボールを止めまくる堅を見ながら他愛ない話をすると、焔は堅のところへ行き自主練を再開した。俺は焔がシュートを2，3本打つのを見てから、用具の後片付けをして家に帰ろうと校門に向かった。
「あ、愛川君だ！」
「やっほ～！」
　そこで金髪2人組に鉢合わせた。ショートカットの方が夜空メル。フブキやまつりと同じ中学で、ヴァンパイアだが日光に弱いというわけではなく、普通に日中も暮らせると聞いた。その容姿と甘い声は密かに男子間で人気がある。確か化学部に入ってたはずだ。
　もう1人の宙に浮いたツインテールの方がアキ・ローゼンタール。フブキらと同じ中学出身のハーフエルフ。たまにツインテールを失くしたりするが、基本的にお姉さん気質で面倒見がいい。ダンス部に入っているらしいが、ヒップホップとかではなくベリー

ダンスを主に踊っているみたいだ。
「２人一緒とは珍しい。」
「今部活終わって一緒に帰るとこだったんだ。」
「あれ、化学部って今日あったか？」
「ううん、今日は化学部じゃなくて、ＡＳＭＲ部！」
「待って知らない部出てきた。そんなとこあった？」
「あまり知られてない部なんだよね。男の子には刺激が強いかもしれないし？」
「ＡＳＭＲってことは立体音響だよな？ちなみに顧問は？」
「ちょこ先生。」
「あー納得。」
　アキとメルに加えちょこ先生までいるＡＳＭＲ部は男にとってまさに魔境だ。これ以上の詮索はやめておこう。
「愛川君は？部活やってたっけ？」
「俺はサッカー部の簡単な手伝い。練習終わったから帰るとこだった。」
「じゃあ途中まで一緒に帰ろうよ！」
「いいね！クラス変わってからあまり話せてなかったし！」
「うえ、いや、えと。」

ＡＳＭＲとか聞いた直後に学年の人気者２人と一緒に下校とか流石に動揺する。俺だって健全な男子高校生やぞ。

「じゃあまつりちゃんになんて言おっかな～？」

「禁止カードやめてくれ！わかったから!!」

「「イェーイ！」」

あいつから噂がどのベクトルで広がるか想像できない。怖すぎる。

そんなわけで３人で下校している。フブキに迷惑かけてないかとか、まつりに変なこと言われてないかとか……。色んな話に花を咲かせた頃、アキからとある話題を振られた。

「そういえば、愛川君って今年の大会出るの？」

「あー、一応ね。来月だっけ？」

「うん、来週から体育館が大会の練習場になるから、それで思い出したの。」

大会というのは、武術王決定戦と魔術王決定戦の総称で、俺の場合は武術王決定戦の方にあたる。大会はこの学校の行事で、毎年この時期になると市の割と大きい体育館を貸し切って丸２日間行われる。いわば体育祭みたいなものだ。ちなみに魔術王決定戦の方は野球場で行われるようだ。どこにそんな予算がある。聞けば毎年参加人数が多く、試合数も多いため結構盛り上がるようだ。実際、去年はすごかった。特に決勝トー

ナメントはめっちゃ盛り上がった記憶がある。
「去年はベスト8まで行ったんだよね！」
「いや、相手との運もあったよ。全部割とギリギリだった。」
「でも1年生で決勝トーナメントはすごいよ！今年も出るなら応援するからね！」
「あぁ、ありがとな。」
「じゃあメルはこっちだから。」
「私はこっちね。」
「じゃあここまでだな。気をつけてな。」
「「じゃあね～！」」
十字路でアキとメルと別れ、そのまま家へと帰った。今日もまた充実した良い日だったな。
（来週から、か。）
あの熱い闘いができる日が近づいていると思うと、ワクワクが込み上げてきた。

◇◇◇

翌日。いつも通りの朝を迎え、普通に授業を受け、昼はいつものテラスで誠、フブキ、

まつりと食べていた。くっつきながらサンドイッチを分けっこしている夏色吹雪を見ながらゆっくりしていると、そこに見慣れたツンツン頭が俺のところへ寄ってきた。あ、夏色吹雪はそのままで大丈夫よ。ごゆっくり。

「杏君こんにちはです！」

「お、竜か。どした？」

「ちょっと大会について聞きたいことがあったので。」

「おー、いいぞ。座りな。」

「はい！失礼します！」

「いらっしゃ～い！」

　この元気ハツラツな男子は黄野竜（きのりゅう）。俺の中学の後輩で、剣道部の元後輩でもある。剣道の才は俺よりもあり、個人戦では全国大会まで出場したこともある強い奴だ。

「大会に出るつもりか。杏からお前のことは聞いてたが、剣道とはまたわけが違うぞ？」

「誠ってば出たことないクセにデカイ顔してるー。」

「うっせ。」

「ま、お前のことだから武術王の方で出るつもりなんだろ？」

「そうなんです。ただルールとかが色々よくわからなくて。」

「おっけ。したらできるだけわかりやすく説明するな？」

武術王決定戦は、その名の通りあらゆる武術の頂点を決める闘い。有志で募集をしていて毎年参加人数が８０人以上を超え、多い時は１００人を超えるとか。
「ホントに大会みたいですね。」
武術と言うだけあって使える武器は様々。剣や刀、槍はもちろん、弓、杖、盾、鞭、ナイフ、斧などから好きな武器を1種類2つまで持つことができて、試合ごとに変えることもできる。つまり、騎士みたいに剣と盾両方を持つことはできない。あと、銃と魔法の使用は禁止されている。
「なるほど。」
「はいはい、手裏剣とかってどうなの？」
「いい質問だフブキ。」
暗器は、手裏剣なら7つまで、苦無なら5つまでと、それぞれに上限数が設けられている。もちろん、使えるのは1種類のみだ。あとは剣とかの装備に加えて、参加者全員が殴る蹴るの格闘もできる。人によっては格闘オンリーもいるが、基本的には使える武器＋格闘の2種類の戦闘方法がある。
「状況に応じて戦闘スタイルを変えられるのか。ふむふむ……ん？そもそもどういう風に試合するんですか？」
試合は特殊固有空間といういわゆる仮想空間で、一般人でも魔法や技を発動できる空

間内にて行われる。痛覚遮断機能（ペインアブソーバ）も搭載されているから、斬られても変な異物感がある程度で痛くはない。そして試合は予選ブロックが５分、決勝トーナメントが１０分。互いにＨＰが設定されていて、時間内に相手のＨＰを削り切るか、時間切れの時によりＨＰが多く残ってる方が勝ち。

「立体格闘ゲームを生身でやる感じですね。」

「そうそう。フィールドのおかげで剣に炎を纏わせたりとかもできるぞ。」

「でもなんで魔法はダメなのにそーいうのはオッケーなの？」

　まつりから鋭い質問がきた。確かに一見すると魔法を使ってるようにも見える。俺も最初見た時は驚いた。

「昔は魔法と同じ括りになってたけど十数年前からただ斬る殴るじゃつまらない、みたいな話になったってどこかで聞いた。」

「なにそれバーサーカー？変態なの？」

「まつり、最後の方もっかい言ってくれ。」

「変態。」

「もっと。」

「バーサーカー？」

「もっと。」

「なにそれ。」
「なんで少しずつ遡ってくのまつりちゃん……。」
ノリのいいまつりとフブキに苦笑いされてる馬鹿は放っておいて。
「それに、魔法(じゅもん)と技(とくぎ)は別モンだろ？」
「そっすね！」
大会が近づきつつあることを改めて実感すると、とある人へのリベンジに心の奥に火がついたのを感じた。

◇◇◇

生徒会室の一角。資料の山と睨めっこをする魔人の男。左腕には『生徒会』の文字が刺繍された腕章。制服をきっちり着こなすこの男こそ、この学校の生徒会長。真っ白で美しい髪をかきあげ虚空を見つめながら、ふぅとため息をつく。
「……もう少しか。」

強化期間

放課後の第一体育館。

大会まであと2週間ということもあり、特殊固有空間が展開された体育館には大会に出場するであろう生徒たちが各自鍛錬に励んでいた。しかし体育館が2つあるとはいえスペースが限られていて、今回も参加人数は96人と多いため、30分程度しか空間内で練習できない。

「ふう、そろそろ時間か。」

体育館の時計を見ると練習を始めてから30分が経とうとしていた。他の生徒の邪魔にならないように空間内を抜けて、教室に置いてある鞄からタオルを取り出し、汗を拭く。家で軽くシャワーを浴びてからバイトに行こうと決め、時間が惜しいので早速行動に移す。クールダウンを兼ねてジョギングで家へと帰ろうと教室を出ると、ショートヘアのアヒル……じゃなくて女生徒と鉢合わせる。

「あ、先輩。」

「スバル？部活はどうした？」
「大会が近いんで自主練っス。」
「行事の方のね。」
　1年生の大空スバル。総合格闘技部とeスポーツ部のマネージャーで元気、活発な女の子だが、声質のせいかたまにアヒルの鳴き声に聞こえるためスバルドダッグというアヒルの擬人化なのではとまで言われている。真偽は不明。
「……。」
「ごめんて。」
「まぁいいっスけど。ところで先輩、あくあどこにいるかわかります？」
　思考を読まれたのかジッと睨まれる。とりあえず謝ると、どうやら人探しをしていたようだった。しかも知ってる名前が出てきた。
「あくあか。時間的にもうバイト行ってると思うけど？」
「あーそっかぁ。どーすっかな、コレ。」
「今日金曜日だしな。俺も今日バイトだから、急ぎのプリントだったら渡しとくけど？」
　スバルは手に持つプリントを見て、どうしたものかと思案している。幸いにも、あくあとバイト先が同じかつ今日は同じシフトの日ということもあり、プリント配達を請け負おうと思った。まぁついでというやつだ。

「あ、じゃあお願いしていいっスか？」
「おう。任せろ。」
　スバルからあくあ宛のプリントを預かり、Ａ４ファイルに入れて鞄にしまう。「頼みましたよー！」と言ってスバルがどこかへ去ると、俺もバイトに行くために家まで帰った。

◇◇◇

「おはようございまーす。」
「おーおはよー。」
　バックヤードに入ると、店長が事務作業をしていた。名前は空ケ丘匠（そらがおかたくみ）。歳は３０代後半だと聞いた気がする。実は俺の母と知り合いで、バイトをするとなった際にとてもお世話になった。快くバイトをＯＫしてくれて本当にありがとうございます。
「店長、来週からのシフトなんですけど……。」
「大会でしょ？調整しとくから頑張れよ、ベスト８君。」
「あ、ありがとうございます。」

行事があるためバイトに入れない時期を事前に伝えていたため、すぐ意図を察して対応してくれる。いやはやすごい人だ。というか大会見にきてるのか？

「お、おはようございます……。」

「おーす。」

「おはよー。」

店長とシフトの確認をした直後、バックヤードにもう1人もじもじと入ってきた。薄紫の髪に水色のメッシュが入ったツインテールがトレードマークの湊あくあ。人見知りを治したいとのことで今年からバイトを始めた新人ちゃん。同じ学校の生徒で、シオンやスバルと同じ1年生。身長も俺の頭一つ分小さいので、小動物みたいな印象を受ける。

「あ、そうだ。スバルからプリント預かってるんだわ。」

「え、スバルから？」

「そ。急ぎみたいだったから代わりに持ってきた。」

「あ、すすすすいません。ありがとうございます……。」

鞄からプリントを取り出し、あくあに渡す。すると俺の後ろから去年コラボしたアニメのA4ファイルが出てきた。

「これ使いな。」

「え、でもこれお店の……。」
「とっくに終わったキャンペーンの余りモンだからやるよ。」
「あ、ありがとうございます。」
「あ、あとあくたん。今日からレジ打ちやってみるか。」
「ふぇ？」
　と、いうわけで俺があくあにレジ打ちの仕事を教えることに。「今日金曜日だけどあんま人入ってないからちょうどいいっしょ。」と店長も言ってた。まぁいい機会だ。
「ツスーーーー……。」
「まぁ頑張れ。まずは俺のを見てな。」
　そう言ってちょうど会計に来た客の対応をする。しかしその客はよく知る顔だった。
「いらっしゃいませ。」
「あれ？杏とあくあちゃんじゃん。ここでバイトしてんだ。」
「子どもは寝る時間だぞ。」
「誰が子どもだって？」
「まだ夜６時……。」
　うーんまさかシオンが来るとは。まぁ客に変わりはないため会話をしながら通常通りにレジ打ちをしていく。

「シオンは大会出んの？」
「出るけど。杏も出るの？」
「おう。アイスのスプーンはいる？」
「あ、お願い。まぁ杏のことだから予選敗退するんでしょ。」
「やかましい。自慢じゃないがこれでも去年ベスト８やぞ。牛乳にストローは？」
「それはいらない。まぁせいぜい頑張って～。」
　シオンの持ってきた品数がアイス、チョコレート菓子２個、牛乳５００ｍｌと少ないのもあるが、慣れるとこのくらいは会話しててもこなせるようにはなった。やっぱ経験よな。
「てかあくあちゃんちゃんと仕事出来てるの～？」
「ぜ全っ然ヨユーだしぃ？レジ打ちなんて３秒でできちゃうもんねぇ。」
「目ぇ泳いでんぞ。７８３円な。」
「はいはい。あ！わかった！杏に変なことされてるんでしょ！」
「おうコラ何言うとる！」
　普通にレジ打ちしてただけなのに急にあらぬ疑いをかけられたのだが？
「先輩はそんなことしないもん！あぁもう、シオンちゃん心配しすぎ！やっぱあてぃしのこと好きなんじゃないの？」

「そう言うあくあちゃんだって、ホントはシオンのこと好きなんじゃないの～？」
「べ、べっつに～？」
あ、これなんだっけ。両片思いだっけ。わからんけど、とりあえず互いに嫌いじゃないのはわかるぞ。なんだかんだで仲が良いやつだ。
唐突なあくシオに若干戸惑いつつも、会計して商品が入ったレジ袋とお釣りをシオンに渡す。
「杏に何かされたらすぐ言ってよね、何度も蹴り飛ばすから。」
「結構キツイからやめてくんねぇかなぁ。」
最後にとりあえず蹴りますよ宣言してシオンは店を出ていった。ったくアイツは……。
「……まぁ今みたいに、客が持ってきた商品のバーコードを読み込んで、会計して、お釣りがあったら渡して、商品渡して終わり。箸とか弁当の温めとか揚げ物の注文とか他にもあるけど、基本はこれだね。」
「わ、わかりました……？」
とりあえずゆっくりもう一度教えようと思った。

◇◇◇

携帯の着信を知らせるアラームが鳴る。手に取り電話に応答すると、友人の声が携帯から聞こえてきた。

「おーフレア。どした？」

『ノエルー。大会もうすぐだけど後輩君から日程聞いてる？』

「うん！再来週の木曜と金曜だって！」

『おっけー。ノエルもその日空いてるよね？』

「もちろん！楽しみだなぁ。」

『去年は2人とも見に行けなかったからねぇ。』

母校の一大イベントに心を躍らせる。観てる方も手汗握る熱い闘いがもう少しで始まろうとしていることに、1人の大学生はワクワクが止まらなくなっていた。

開会式

大会当日。学校から駅2つ分離れたところに、市の運動公園がある。野球場、サッカー場、陸上競技場、テニスコート、そして体育館と運動設備が充実したこの場所で、年に1回の一大イベントが始まろうとしていた。

生徒会や運営役員は朝7時から会場設営、大会参加者は朝9時から体育館、野球場で最終調整をして、朝11時に参加しない生徒と集合して出欠確認のあとに開会式だ。大会は一般公開もされており、開会式が終わったあとから一般人も入れるようになる。

そんなわけで朝の調整を終わらせて今はクールダウン中だ。他の人の邪魔にならないところで柔軟体操をして、使った筋肉をよくほぐす。

「んひぇぁ?!」

「にゃっ?!」

脚を広げて前屈をしようとした時に首筋が冷たい感覚に一瞬支配された。芝生の音で誰か近づいてきているのはわかっていたが、冷えた不意打ちは想定外だったため変な

声をあげてしまう。しかしそのおかげで実行犯はわかった。
「良い反応だねー！ナイスリアクション！」
「ナイスだフブキ……くくっｗ」
「あ、蒼葉君、笑っちゃダメ……あはははは!!」
「ま、まつりちゃんがやれって!!」
「誠がやれってー。」
「ミオが。」
「フブキがやりたいって。」
「なんでぇぇぇ!!」
「よくわからんが賑やかだな。」
今日も変わらず愉快な友達は差し入れを持ってきてくれたみたいだった。そのうちの１つがフブキの持ってるカラダにピースな５００ｍｌペットボトルなわけで。
「はい、どうぞ。」
「ありがと。」
ペットボトルを受け取り、キャップをあけて飲んで喉に潤いを供給する。あぁ、美味い。
なんか青春してる感じがする……。

「で？調子はどうよ。去年より上に上がれそうか？」
「いやーわからん。予選の相手が相手だし。」
「お、プログラム出たか。見せてくれ。」
　誠にトーナメント表が載ったプログラムを渡すと、他の３人も覗き込むように予選ブロックの対戦相手を確認する。
「うわっ……予選はＸブロックまであるの？」
「今回の参加者は９６人だと。」
「普通の大会でもＸは聞かないね……。」
「予選は４人１ブロックのリーグ戦だからな。」
「あった。Ｉブロックだって。」
「余はＦブロックだよ。」
「びっくりした、あやめちゃんか。」
　ヌッと湧いたあやめに一瞬驚く。実はあやめも大会参加者である。どうやら家の関係で参加必須らしく、今年も参加するようだ。去年の成績は俺と同じベスト８。鬼人の力はやはり伊達ではない。
「ワタシはＣブロックですね～。」
「ココちゃんだ！おはようー！」

「先輩方、おはようございます～！」

またヌッと湧いたココさんにフブキが挨拶をする。ココさんの方が学年は上だが、中学時代の序列で言うとフブキ達の方が上のため、ココさんにとってフブキ達は先輩にあたるらしい。よくわからんけど慣れた。

「舎弟君よぉ、去年のリベンジ、待っとるからな？」

「首を長ーくして待っててください。すぐ追い越すんで。」

「お？言ったなオメー。」

去年の準々決勝でココさんとあたった俺は善戦した方だが圧倒的な差で負けた。自分の中で割と悔しい気持ちが残ったため、次があればとリベンジをしたいと思っていた。決勝トーナメントでぶつかるのは一体いつになるのか……。ちなみにココさんは去年の王者。竜種つえー。

「予選落ちでもしたら指詰めてもらうかんな？」

「ヒェッ……頑張ります。」

「じゃ、またあとでな！」

エールを貰うと、ココさんは野球場の方へと歩いていった。時計を見るとl1時になる5分前だった。あと少しで開会式が始まろうとしている。俺たちもそろそろ行かなくては。

「予選落ちは絶対できなくなったね？」
「はぁ～。しゃーない、ちょっと本気出すか。」
「お、唐突な強キャラ感。」
「でもお前が言うとなー。」
「なんかねー。」
「余とも決勝で闘わないと一生パシリにするよー？」
「色々おかしいなー。」

◇◇◇

野球場の前でフブキ達観戦組と分かれ、大会参加者の俺たちは選手入口から入る。魔術王決定戦の参加者１１２人もいるため、中の人数はすごいことになっていた。ちなみに魔法の方が人気がある。非日常感がクセになるとか。大丈夫それ危ないモンじゃない？
「あ、杏じゃん。」

「シオンか。小さくて見えんかった。」
「お？それ余に言っとる？」
「なんでそうなる？」
　人混みからシオンを発見してちょっといじると、なぜかあやめのヘイトを買う。確かに俺からしたら２人とも頭一つ分小さいが。
「あ、杏先輩。こんるしです。」
「お、るしあも出るのか。」
「はい。色々と不安ですけど……。」
　１年生の潤羽るしあ。死霊術師でたまに虚空と会話をしている不思議ちゃん。人前に出るのが苦手だと聞いていたが、今回はちょっと頑張ってみるつもりなのだろう。ただしキレると叫びを超えて咆哮をするので注意。
「るしあなら大丈夫だと思うよ。できることをやればそれで一歩成長。」
「は、はい。ありがとうございます。」
「ちょっと杏がるしあちゃん口説いてるー。」
「お前さんって小さい子が好みなのか……？」
「誤解生まれるからやめてくれ。試合前に消耗したくない。」
「ナニがどっこいだって？」

「あ、やったわ。すまんあやめ決勝行けんかも。」
「余としてはパシリができるからそれでいいんだけど。」
「ダメっぽい。」
　喋れば喋るほど墓穴を掘って板挟みに。早く開会式始まんねーかな。しんどい。
「先輩今まな板って言いました？」
「言ってない。思ったこともない。気のせいよ。」
「ならいいですけど。」
「はーい大会参加者のみんなー！もうすぐ入場するからねー!!」
　グラウンドに通じる出口からかなたさんのよく通る声が響く。もうすぐ開会式が始まるそうだ。助かった。
『これより、開会式を行います。選手入場。』
「はーいそれじゃ走らないで入場してねー。」
　球場にアナウンスが響き渡ると、かなたさんの誘導のもと球場内にぞろぞろと入場していく。球場内の土に足を踏み入れると、観客席からの歓声が肌を突き刺し、イベントの大きさを改めて感じる。なんなら迫力で飛ばされそうになるまである。
「うわぁ……!!」
「やっぱすごいよなー。」

「五輪代表選手にでもなった気分だな。」
　およそ２００人の大会参加者……もう選手でいいや。選手が内野に集まり、体育祭とかでよくある校長や体育教師の話を聞いた。『開会宣言。』とアナウンスが流れると、ホームベース付近に生徒の模範と言っていいほどに制服をきっちり着こなし、左腕に『生徒会』と書いてある腕章をつけた白髪の生徒が現れる。
『よー諸君！今年もこのイベントがきたな！』
　彼が3年生で現生徒会長の白海直先輩。白髪のサラサラヘアーから覗く2本の角は彼が魔人であることの証拠だ。そしてやはり顔がいい。モテないわけがない。そんでフランクな人柄がさらに人気を呼んでいる。
「俺には少し眩しすぎるな……」
「杏にはあんな爽やかな雰囲気出せないねー。」
「うっせ。」
『まぁ特に難しい挨拶はしないわ。今日は予選だしな。早く闘りたい者もいるだろうから、手っ取り早く済ませよう。』
　スラスラと通る声がマイク越しに球場に響き渡る。時間が押してるわけではないが、一部の選手からは闘志が隠しきれなくなってきているようだ。それを察してか、白海先輩はサッと開会宣言を済ませるつもりらしい。まぁそれはそれでこちらも助かるが。

『今年も1年生が多く参加してくれている。とても楽しいイベントだから是非楽しんで欲しい。2年生や3年生も1年の中で数少ないはっちゃけられるイベントだから存分に暴れてくれたまえ。……さて、挨拶もこのくらいにして、開会宣言をしよう。』

球場のモニターにいつのまにか映し出された映像は、内野上空を飛ぶドローンからのものだ。ドローンが映すのはカメラ目線の白海先輩。スッと息を吸った白海先輩はおもむろにマイクスタンドからマイクを取り、開会宣言をする。

『これより、武術王決定戦、魔術王決定戦の開会を宣言する！いつからか総称して大会と呼ばれるようになったが、俺はあえてこう言おう!!

バトルフロンティア!!!開幕ぅぅぅぅ!!!!!!』

白海先輩が宣言したの同時に、ドロ!!ンは外野の方まで後退する。外野いっぱいまで後退すると、上空に昇っていき球場全体を映し、その後に雲が浮かぶ空を映す。

遂に、一大イベントが始まった。

◇◇◇

「そうそうそう、まずは引きで撮って、そんで会場全体を映して、最後は空を映す！完璧なカメラワークぅ!!!」
「ここでアニメのタイトル出たら最高!!!」
「フブキわかってんなぁ!!カメラが引いたあたりでＯＰ（オープニング）流そうぜ!!イントロのあのギターから!!!」
「イエエエエエイ!!!!」
「フブキ達どしたの？」
「色んなアニメ観てたらわかるって。」

予選Ｉブロック

白海先輩の開会宣言で大いに盛り上がった開会式が終わり、１３時から予選ブロックが始まる。武術王決定戦の予選は、体育館のメインアリーナを目一杯使って４ブロックのリーグ戦をＡ～Ｄブロック、Ｅ～Ｈブロックと同時進行で行う。予選は１試合５分だから１ブロックあたり３０分程度時間がかかる。そのためＩブロックの俺までちょっと早送りしようか。

ちなみにＣブロックはココさん、Ｆブロックはあやめ、Ｈブロックは後輩の黄野竜が勝ち上がった。試合も見たけどドラゴンと鬼人の力はやはり凄まじく、あっという間に決勝進出を決めた。竜も少し危なっかしい所はあったが、なんとか決勝進出した。

「それでは、予選Ｉブロックを始めます。選手は準備をお願いします。」

Ｉブロックの審判から試合を始めると言われ、１試合目の相手と見合って互いに特殊固有空間が展開された試合場に入る。試合場は２０ｍ×２０ｍの広さで、特殊固有空間によって高さの上限が７ｍとなっている。特殊固有空間は試合開始前に展開され、選手

が潜ると内部と外部双方から干渉ができなくなる。飛び道具が空間から出て通行人が怪我をしないようにされている。

空色に薄く展開されたバリアをコンコンと軽く叩き、外に出れないことを確認すると試合場の中央に向かい対戦相手と握手をする。

「今日はカジノに行かなくていいのかぺこーら？」

「今日は特別ぺこ！今日だけは勇者ぺこーらぺこよ！」

「遊び人みたいな格好でよくいう。」

「これはぺこーらの正装ぺこ！」

「あ、そう。」

「冷たくないぺこか!?」

予選1回戦の相手は、同学年の兎田ぺこら。長いうさ耳が特徴のうさぎの獣人で、語尾に「ぺこ」をつけて喋る。最近ハマったゲームの影響で勇者に憧れているようで、強化期間中でも色んな技を出して練習しているのを何度か見た。ちなみに勇者は土日祝限定で、平日はカジノに入り浸っているとか。スロカスかな？ツインテールに人参が刺さっているのかはいつでも食べれるようにとのこと。実は結構な幸運兎でもある。

普段は制服やジャージ姿だが、今はバニーガールの衣装の上に白いワンピース（……なのか？）を着ている。これが正装ってどんな一族ぺこ？

「そーいうあんたは侍にでもなったつもりぺこか？カッコつけちゃって恥ずかしい～。」
「いや、これはとある人物の要望でだな。」
俺がさっきまで着ていたジャージは一体何処へ、紺色ベースの剣道の道着と袴に着替えていた。
実はこの特殊固有空間のシステムで、空間内は一種の仮想空間になるため、選手は好きな服装になることができる。俺もどこぞの剣士みたいにコートとか着たかったが、とあるオタク（どこぞの白狐）に激推しされてこの格好になった。まぁ結果的に武器とも合うからいいんだけど。ちなみに選手名も一応変えられたりする。
ふと後ろの観客席を見れば、フブキ達が「がんばれー！」と聞こえてきそうなくらいヒラヒラと手を振っている。そんで誠はフライドポテトを食べていた。さっき昼飯食ったのにまだ食うか。
「それじゃ、位置について。」
審判の先生に誘導され所定の位置につくと、左腰にある愛刀を鞘から出し、視界の左上に緑色のＨＰバーがあることを確認する。
互いに相手のＨＰを知るために、空間内に入った選手の頭上と視界の左上に緑色のＨＰバーが出現する仕様になっている。それと同様に外から見てもわかるように空間内上空にも選手それぞれのＨＰバーが表示される。どこぞの格ゲー感がすごい。

「使えるか知らんけど魔法使ったら失格だかんな？」
「わかってるぺこだよ！」
そんな感じで互いに煽りあうと、試合開始を知らせるブザーが鳴った。

◇◇◇

「余、ちょっとやりすぎちゃったかもなー。」
「あやめちゃん、お疲れ様。」
「やはり鬼人は伊達じゃねぇな。」
観客席では誠達が杏の応援に来ていた。そこに試合が終わったあやめも合流してより賑やかに。そこにある一般客も加わり、さらに賑やかになる。
「あやめせんぱーい！試合観ましたよー！かっこよかったですー！」
「おーノエルちゃんじゃんか！来てたのか！」
「はい！フレアも一緒です！」
「ホントに２人は仲が良いねー。」

「やっほーフブちゃん！」
「フレアだーー！久しぶりーー！」
　銀髪ショートの女性が白銀ノエル。ゆるふわ脳筋の癒し系お姉さんで実は杏と竜の剣道の先輩。この学校の卒業生で今は大学生として生活している。ちなみに一昨年の武術王決定戦王者でもある。そしてデカイ。
　そして隣にいる金髪褐色ロングの女性が不知火フレア。ダークエルフと間違われがちだがハーフエルフである。ノエルと同じくこの学校の卒業生で、弓道部に所属していた。ノエルととても仲良しで、一昨年の武術王決定戦ではベスト４という好成績を残す実力者でもある。そしてデカイ。
「去年は来れなかったので応援に来ちゃいました！」
「ちょうど今ぺこらと杏の試合始まるとこだよ！」
「えっ！ぺこらっちょと杏君同じブロックなんだ！」
「お、ちょうど始まったみたいだぞ。」
　試合場を見ると、剣を構えるぺこらと刀を構える杏が剣を交えるところだった。
「おー、後輩君の服様になってんじゃん！」
「本人は普通の服にしようとしてたけど、フブキがアレがいいって駄々こねたからね～。」

「まつりちゃん言わないでー！」
「次はスーツ着せてもいいかもしれないですよ！」
「お、いいじゃん！決勝進出したらお願いしてみようよフブキ！」
「なんで私に言うの!?」
（主に杏の服装で）話が盛り上がっている横で、その光景を眺めながら1人もそもそとポテトを食べる男が。
（あいつの着せ替え人形化が決まったな。それよりも……うーん、女の子同士の戯れ最高!!）

◇◇◇

試合開始早々に「『ぺこスラーッシュ』!!」とか言って横一閃の光の刃をぺこらが出した時は少し焦ったが、しゃがんで回避してすかさず刀から地を這う衝撃波を出す。
「やべっ！」
ギリギリのところで躱すぺこらだが、左脚が少し衝撃波に触れて、ぺこらのＨＰバー

の緑色部分が減る。衝撃波が触れた部分は赤いエフェクトになり、ダメージを受けたことになる。
「ちょっとは手加減しろぺこ！」
「一応してるんだよなぁ。」
「うそぺこじゃん。」
　実際手加減はしてる。今のに少し力を入れたらぺこらのＨＰは今の３倍くらい減っていただろう。あと一応女の子相手だし。
「一応って何ぺこかぁ!!」
　また俺の思考を読んで剣に炎を纏いながら斬りかかってくるぺこら。それに対抗するように刀に氷を纏わせる。俺の思考簡単に読まれるのナンデ？
「オルァッ!!」
「はぁっ!!」
　炎と氷のいくつもの剣撃がぶつかり合い、火花と氷の破片が飛び散り互いのＨＰが少しずつ削れていく。そしてぺこらの大振りの上段斬りにこちらも上段斬りで合わせて鍔迫り合いに持ち込む。顔の側でチリチリと燃える炎が少し熱いが気にしてられない。
「ほれっ！」
「ちょっ!?」

鍔迫り合いの状態から後ろに下がりながらフッと振りかぶると、ぺこらは頭上に剣を横にして頭を守ろうとする。そしてガラ空きになった左脇腹に一撃スパッと入れてそのまま後退する。剣道の『逆胴』と呼ばれる技だ。それによってぺこらのＨＰはさらに減り、半分を過ぎて黄色に変色する。自分の残りＨＰを見て苦悶の表情を浮かべるぺこら。まだやるというのなら相手になるぜ？

「くぅ……!!勇者は、こんなとこで終わるわけないぺこなんだよぉっ!!」

「来いっ!!」

まだ諦めてないのか、上段で構えたまま突進してきた。それに対して俺は刀を鞘に納め、いつでも抜ける体勢になる。一発で残りＨＰは流石に削れないが、これで諦めてくれることを願う。

『刹那』ッ!!!」

ぺこらが剣を振り下ろす前に俺の間合いに入る。俺は一歩踏み出し、剣道の『抜き胴』の要領ですかさず抜刀、ぺこらの左脇腹に一閃をお見舞いする。

想定外の攻撃をくらい、ぺこらは派手に転ぶ。頭上のＨＰバーを見ると、ぺこらのＨＰは全体の残り１割５分程度しかなく、瀕死を示す赤色に変わっていた。思ったより削れたのはどうやら会心（クリティカル）が入ってダメージ加算がされたようだ。

「……。」

仰向けのまま何も言わないぺこら。しかしすぐに手足をジタバタさせて悔しさを身体で表現する。

「あーーーーもう!!!降参ぺこ降参ぺこ!無理ぺこだよーー!!!」

試合開始からおよそ2分で試合終了を知らせるブザーか鳴り決着がついた。剣道では降参なんてないからこれは優しい設計。実際、これ以上女の子を斬りたくはなかったし。

「あ、ありがとうぺこ。くっそー、少しくらいいけると思ったぺこなんだけどなー。」

「まぁ構えとかスキが多いけど、頑張れば普通にいい勝負できると思うから頑張りなよ。あと2回はあるんだから。」

「なんかムカつくぺこ。」

「実際いい線行ってると思ったけどな。」

「えぇ～、そうぺこか?」

手を差し伸べてぺこらを立たせてあげて、ぺこらとの試合を振り返りながら個人的に評価をすると、テレテレとにやけ始めた。ちょろい。

「とにかく!この勇者ぺこーらに勝ったんだから、他の奴に負けんじゃないぺこだよ!」

「はいはい。」

捨て台詞を吐いて特殊固有空間を出るぺこらに、最後に勇者として成長するためのア

ドバイスをしようと思い声をかけた。
「あとぺこら。平日でも剣振って勇者っぽいことしてみろよー。」
「うっせぇ!!!」
治す気はなさそうだ。まぁそういう勇者もいるか、と無理矢理納得しておくことにした。
その後の試合は特に問題なく勝ち、決勝進出を決めた。とりあえず指を詰めたりあやめのパシリになることはなくなった。ちなみにぺこらはあのあと2回とも勝ったようだ。勝った時のあの「ふぁ→ふぁ→ふぁ→ふぁ→」という独特な笑い声はちょっとクセがあると思うが。

◇◇◇

「「お疲れ様ー!」」
「おーサンキュー。」
「杏君、決勝進出おめでとう!」

「あ、ノエルさんにフレアさん。来てたんですね。」
「そりゃあそうでしょ！去年は見に来れなかったから楽しみにしてたんだよ！」
　観客席に戻ると応援メンバーと先輩のノエルさんとフレアさんがいた。『大会の日程決まったら教えてね！』と連絡が来て返事をしたから来るとは思っていた。
「いい感じにぺこらをボコしてたねー。」
「一応手加減はしましたよ？いくらなんでも女の子相手ですし。」
「ホントぺこだよ！ぺこーらは悔しいぺこ！」
「どこから湧いた。」
　ノエフレの後ろからぺこらが出てきた。計８人であの試合がどうだの、ここがカッコ良かっただの色々褒められていると、親友の姿が見えないことに気づいた。
「あれ、誠の奴は？」
「あ、それならそこで。」
「おん？」
　まつりが指さした方を見ると、とてもいい姿勢で観客席に座ったまま合掌をして白くなっている誠がいた。何があった？
「試合観戦中に起こったまつり達のイチャイチャの波動に耐えられなくなったみたい。」
「あっ……。」

「」
「ん？」
誠が何か喋ったような気がして近くでよく聞いてみる。
「ノエフレは至高……」
「それはそう。」
激しく同意。

決勝トーナメント

大会２日目。今日は朝９時に野球場で出欠確認をして１０時から各決定戦の決勝トーナメントが始まる。出欠確認までまだ時間があったため、決勝トーナメントのオーダーが掲示されている場所まであやめと行った。そこには２枚の大きな貼り紙があり、武術王決定戦と魔術王決定戦それぞれのトーナメント表が書かれていた。

「えーと……余は決勝Ａブロックでお前様が決勝Ｂブロックだな。」

「よっしゃー･シードだ!･」

「おお!･よかったな!･」

参加人数が９６人で予選が４人１ブロックの２４ブロック。つまり決勝トーナメントでも２４人いる。そして決勝Ａ～Ｄブロックの山に６人ずつ分けられ、各ブロックにシード枠が２つずつ設けられている。シード枠は予選ブロックで圧倒的な戦績を残した選手がもらえるため、予選の戦績が良かったのかギリギリシード枠に入ることができ

た。
「じゃあお互いに準決勝まで勝たないといけないな。」
「刀使いだけに、ってか?」
「え?なんて?」
「ごめんなんでもないわ。」
本気の「余、聞いてなかった」なのかわざとなのかは分からないが、渾身の親父ギャグをスルーされてちょっと悲しかった余。
「お、愛川君じゃん!こんやっぴ~!」
「トワ様じゃないですか。こんやっぴ~。」
「トワちゃんこんやっぴ~。」
後ろから聞き慣れた挨拶が聞こえて振り向くと紫の髪をツインテールにした小悪魔、3年生の常闇トワ様がいた。本人の希望で先輩ではなく様で呼んでと言われている。かなたさんやココさん達とよくいるところを見かける。普段は可愛らしい声なのだが、歌うときの声のギャップでとても驚いた印象がある。ぜひ一度聴いてみて欲しい。一人前の悪魔を目指してるとのことだが、悪魔的所業より天使的行動の方をよく見るのは気のせいかな?
「愛川君とあやめ先輩は決勝に進んだんですか?」

「そうだぞ！2人ともシードだ！」
「うへぇぁ、すごいな！」
「トワちゃんは確か魔術王の方に出てたよな？」
「それが聞いてくださいよー！実はトワ、予選でシオン先輩と当たったんですけど、ボコボコにされて予選落ちしちゃったんですよ～。」
「あーシオンと当たったのか～。残念だったな。」
　トワ様は確か去年の魔術王決定戦の決勝トーナメントには勝ち進んでいるはずだが、そのトワ様を負かすってシオンは一体……。
「愛川せんぱ～～い!!!」
「うわっ、ねねね。」
　トワ様の愚痴を聞いてると、また後ろから1年生の桃鈴ねねに声をかけられる。元気いっぱいな女の子で金髪のお団子が目印。銀の魂を読んで育ったらしく、小学男子みたいな言動をすることもたまにあるが、笑った時に見える八重歯がまたキュート。
「おーすねねち。」
「おーっす！」
「おいーっす！」
　もはやお決まりとなったハイタッチをすると、その後ろから金髪のフェネックが追加

のハイタッチをしていく。
「ポルカおったんか。」
「おるよー！」
「ポルカちゃんとねねちゃんだー！」
　このフェネックが尾丸ポルカ。ねねちと同じ1年生で、サーカスの座長を目指しているとか。目元にはハートやスペードなどのトランプのマークの……なんだ、アクセ？ペイント？わからんけどそのマークがついている。一度ジャグリングを見せてもらったことがあるが……まぁ伸び代があるということで。
「あれー？トワワ先輩予選落ちしちゃったの～？」
「うっさい！トワだってやればできんだから！今回はちょっと運がなかっただけぇ!!」
「まぁシオン先輩が相手じゃあねぇ……」
「くぅ～……まだ悪魔としての修行が足りないか……。」
「およ？愛川先輩とあやめ先輩は決勝進出！しかもシードですかぁ！いやぁすごいですね！」
　チラチラとトワ様の方を見ながら俺とあやめの決勝進出を賞賛するねねち。これにはトワ様も……。
「おうこらちょっとツラ貸せクソガキぃ!!」

「やぁだよ～！」
　あぁ、やはり。我慢の限界か、トワ様はねねちを捕まえようと追いかけ、それから逃げるように球場のスタンド席に逃げていくねねち。仲が悪いわけでは無さそうだがなぁ……。
「お、もうこんな時間か。出欠確認始まるから余達も戻ろうか。」
「そうだな。行くぞおまるん。」
「へいへーい。」
　腕時計を見ると時刻は８時５０分。担任によってはもう出欠確認を始める時間のため、残った３人でスタンド席へと歩いていった。
「おまるんそっちはグラウンドに出る方や。」
「アレェ?!」

◇◇◇

決勝トーナメントでは試合場の広さが３０ｍ×３０ｍ、高さの上限が１０ｍと変わり予選より広く使うことができる。それに伴って決勝トーナメントは２ブロックずつで行われる。各ブロックの勝者による準決勝、そして天辺を決める決勝は午後から行われる予定だ。

メインアリーナで決勝Ｂブロックの選手の確認をスタッフさんがしていると、同じブロックである竜から声をかけられた。

「杏君、もう１人のシードのホワイトって人、何モンなんですかね。」

ふと横を見ると、隣の決勝Ａブロックのあやめがこちらに気づき笑顔でヒラヒラと手を振る。おっほ、かわ余。そういうとこやぞ。

……ではなくて。決勝Ｂブロックの選手の中に、全身を覆う白いマントに、同色のフードを深く被る選手がいる。背丈は俺と同じか少しデカイくらいでフードは一部盛り上がっている。おそらく獣人か魔人なのではないかと思う。予選では３試合とも１分足らずで勝ったというとんでもない選手だ。点呼の時に手を挙げたからこの人がホワイトなのだろうが……。

「まだ空間も展開されてないのに、すごいやる気ですね。オーラみたいなものを感じます。」

「それもそうだが、まずは目先の試合な？勝てば俺とまた闘えんだから。」
「そーー……ですね！剣道じゃないのが残念ですけど。」
「剣道の腕はもう落ちたよ。頑張れよ。」
「はいっ!!」
竜は決勝Bブロックの1回戦目で、勝てばシードの俺と闘うことになる。できたら闘りたくないが久しぶりに後輩と闘いたいと自分もいて、少し複雑な感情を抱えながら後輩を送り出す。
さて、俺のとこまで来れるかな？

……って思ってたら来ました。フラグって怖いね。
「来ちゃったかー。」
「来ちゃいました。」
空間内で竜と握手をする。竜の服装（スキン）は黄色のロングシャツとズボンに青のベスト、バイオレット色のマントに、手足には革のブーツと手袋とツンツン頭と相まってどこかで見たことがある感じになっている。
対して俺は一部の人（オタ狐達）の希望により、今度は黒スーツに白手袋と執事スタイルにされ

た。なんなら髪も綺麗にセットされている。最初は俺も断ろうと思ったが、複数の女性から上目遣いで「お願い」なんて言われたらそんなん無理やろ。ミオやぺこらあたりにジト目で見られていたのはきっと気のせい気のせい。あくまで服装(スキン)だから動きに支障はないから別にいいけどさ。

観客席の方を見ると、あやめの応援も兼ねてなのかAブロックとBブロックのほぼ中間部分を陣取る応援団を発見。昨日の4人に加えてノエルさん、フレアさん、ぺこーらの3人が加わり賑やかになっていた。あそこで誠は生きていけるのか果たして……。

「まー、来ちゃったからにはやるしかないしな。じゃ。」

「はい。」

時間が惜しいため、試合場のほぼ中央で剣と刀の剣先を交わし蹲踞。すぐに立ち上がり、両者下段の構えのまま5歩後退。中段の構えに戻すと、ふと笑みが溢れた。

「息ピッタリですね。流石杏君。」

「作法は身体に染み付いてるからな。忘れるはずないさ。」

互いに笑い、数年前の光景が脳裏に甦る。少年団の試合稽古で幾度となく剣を交えた剣友とも言える竜と、こうしてまた剣を交えることができるのはやはり嬉しい。できれば闘りたくないとか思っていたが、結局俺はこいつとまた試合がしたかったようだ。

「さぁ始めようか。」
「さぁ始めましょう。」
試合開始を知らせるブザーが鳴ると、決勝Ｂブロックからはものすごい気合いの入った２つの声とともに、凄まじい衝突音が聞こえたという。

ＶＳ輝竜

咆哮とも呼べる２つの気合い充分な声がアリーナ全体を包み、大会役員や決勝Ａブロックで試合中の選手さえ一瞬振り向くほどに会場の視線を集めた決勝Ｂブロック３回戦。その迫力に観客席のフブキ達も驚愕する。

「ふ、２人ともあんな声出せるんだ……。」

「久々に２人の試合見るなー！どうなるんだろ！」

「そっか、ノエルちゃんは２人の先輩なんだもんね。」

「ほう、そうなんですか。」

「剣道の少年団が同じだったんだよ。始めたての頃はそりゃもう可愛くてな……。」

「ノエル、鼻の下伸びてる。」

「いけね。」

「「うぉっ!?」」
「隣スゲェな。」
「負けたら余のパシリだからな～。頑張れ～。」
「決勝(てっぺん)で会おうや、舎弟君。」
「お、何してんのココ。」
「おー天使公。舎弟君の試合見てんだよ。」
「あー愛川君。去年はココにボコされたからね。今年はリベンジできるかな?」

◇◇◇

何も技を使わない純粋な合い面はすんでのところで躱され、互いの左肩を少し抉る程度のダメージを負った。火花が散っていると錯覚するほどの激しい鍔迫り合いを経て牽制しあいながら一旦距離を取る。
（この感覚……久しぶりだな。）

剣道の試合をしたときと似た緊張感に、思わず口角があがる。内心楽しくてしょうがないのだ。それは竜も同じようで、構えは崩さずにぴょんぴょん飛び跳ねて身体で表現している。可愛い奴だ。

「竜!こっから手加減なしだかんな!」

「はいっ!!」

いつも以上に元気な返事をすると、竜は両手で持っていた鋼鉄の剣を右手に持ち替えて肩に担ぐようにして構えをとった。それに合わせて俺は両手持ちのまま左足を一歩前に出して上段の構えをとる。ここからは自分のスタイルで闘おう。

「はぁっ!」

距離をつめて上段からの重い縦一閃を放つが、竜が一歩引いて躱しすかさず俺の左肩目掛けて剣を振り下ろす。そこに振り下ろした刀を急激に斬り上げる『燕返し』で迫る剣をいなす。その勢いのまま身体を左回転させて再度袈裟斬りを試みるがそれも防がれる。

「おらよ!!」

「うおっ?!」

鍔迫り合いから腹を蹴って竜の体勢を僅かに崩すと、喉目掛けて刺突を放つ。仕返しとばかりに喉元に迫る剣先を首を傾け、互いに首筋を掠らせながらも回避する。そして

袈裟斬りをしながら退くと竜の身体に左肩から右脇腹にかけて浅く傷がつくが、竜も同じことを考えたようで俺の身体にも同じような傷ができる。

実力はほぼ五分（イーブン）。両者一歩を譲らない闘いが続くが、残り時間３分、互いのＨＰが残り３割となった頃でその差が開く。

抜刀術発動のために一度納刀すると、竜は剣を天に掲げる。すると軽めの黒雲が発生し、剣に雷が落ちると稲妻の剣が出来上がる。それを身体の左側に構え横一閃の光の刃を放つ用意をする。予選ブロックでぺこらが放ったもの自体威力が高いものだが、それの上位互換かつ雷を纏うこれは威力が段違いに上がっているはずだ。まともに食らってみな、飛ぶぞ。

「ぺこら、杏君の対戦相手をよく見てな。」

「ええ？杏じゃなくて？」

「そ。勇者になりたいならアレくらいやんなきゃ。」

「うええ……」

「『ドラゴンブレイク』!!」

竜が技名を叫ぶと一回転……せずに、そのまま横一閃に剣を振り抜いた。予想外

のことに一瞬だけ動きが止まり、辛うじて回避するが左腕に技をモロに受けてしまい、俺のＨＰが減り黄色から残り２割を示す赤色に変色する。

剣の技の中で奥義級として登録されている『ドラゴンスラッシュ』（ぺこらはなぜかぺこスラッシュと言ってたが。）と『ドラゴンブレイク』は通常は一回転してから技を放つ。それを構えからすぐに放たれたため、反応が少し遅れてしまったのだ。やりおる。

（ニヤリ）

「こいつっ……!!」

してやった、と顔に書いてるぞお前。見ない間に生意気になったな？

なんてことを考えてる時間はない。抜刀しつつ衝撃波を５つ、それぞれ別角度で放つが稲妻の剣に全て弾かれる。だがこれで剣を帯びていた雷を取り除けた。すかさず顔のすぐ右側で構え直し左手で照準を定める。一気に距離を詰めて間合いに入ると、神速の刺突『刹那』を放ちすぐに後退する。

体勢が整わないまま『刹那』を食らい大きくバランスを崩すが、剣を立てて強引にその場にとどまる。竜の左肩には握り拳程度の大きさの負傷エフェクトがかかり、ＨＰは俺と同じく２割を下回り赤く色を変えている。残量的には俺の方が若干多いくらいか。

（さすがに、しんどっ！）

試合開始してからおよそ８分が経過する。その間でほぼ全力で互いにＨＰを削り

合っていればそりゃ息も切れる。しかし疲れを見せては相手に攻撃の機会を与えるだけなのは剣道でよくわかっているのでできるだけ相手に悟られないように呼吸を整える。まぁ剣道経験者同士だから竜もそれはわかってるだろう。

次の一太刀で勝負が決まるかもしれないことも。

◇◇◇

観客席から後輩（ナイト）２人の激しい攻防を見守る。ちょっと見ない間に逞しく成長している姿に、少し感動を覚える。

「え、あれって回んないで出せんのぉ?!」

「そうみたい。すごいね彼。」

「愛川君もあそこから反撃したよ！」

「「頑張れ～!!」」

ぺこらは竜君の『ドラゴンブレイク』に驚き、それをフレアが賞賛して、フブキ先輩が杏君の反撃（カウンター）に尻尾を振りながら興奮し、ミオ先輩とまつり先輩が声援を送る。愛され

てるなぁ、と思う。
「ノエル、また顔緩んでる。」
「たるんどる?」
「言ってない言ってない。」
軽くボケる。また無意識にニヤついてしまっていたようだ。
試合場に視線を戻すと2人も次が最後なのを悟ったのか、竜君は先程と同じ構え、杏君はやや前傾姿勢で刀を握る両腕を下げている独特の構えで睨み合っている。竜君は構えこそ『ドラゴンブレイク』と同じだが剣には風を纏っている。杏君は腕を脱力させて最小限の力で刀を握っているが、切先はしっかりと竜君の方を向いていて、刀には同じく風が纏っている。2人とも速度と貫通力がある風属性の技で決着をつけるようだ。
「残りHP的に次が最後になりそうだね。」
「そうだね。さて、どっちが勝つかな。」
フレアとそう話し終わったタイミングで、2人が動き出した。
タイマーが示す時間は、残り30秒を切ったところだった。

◇◇◇

残り時間が３０秒を切ったタイミングで突き上げるように腕を竜の胸元目掛けて放つ。それを読んだ竜はその腕ごと斬り飛ばす。結果、切断された俺の右前腕が竜の左後方に飛んでいく。

「なっ!?」

竜の反応に思わずニヤつく。刀を両手で握っていたのに斬られたの右腕だけ。そして自分の胸を貫通して刺さる刀。さてこれはどういうことか。

構えの段階では確かに俺は両手で刀を握っていたが、技を放つ寸前で右手を離して何も持っていない右腕だけで突きを繰り出した。竜は速度と貫通力がある風属性の技で俺の両腕を飛ばして無力化しようと考えるとこまで読んで、俺はあえて右腕を差し出した。

そしてコンマ何秒差で刀を持つ左腕を突き出してやれば剣を振り抜く途中である竜は防ぐ手段がないため、そのまま胸にヒットする。

まぁつまりだ。少しＨＰが減るリスクがあったが竜よりもＨＰが高いことを利用して右腕を囮にして、本命の左腕でトドメをさしたってコト。以上。

残り時間はあと２０秒ほど。竜のＨＰはあと1割もない量に対して、俺のＨＰはあと

1割弱。本当にギリギリの闘いだったが、なんとか追い込んだ。
竜の顔を見ると、悔しさと嬉しさが半々といった複雑な表情をしていた。……待て、嬉しさって何？何に対する嬉しさなん？
「……経験の差、って言うんですかね。」
「かもな。」
「いやぁ、でも楽しかったです。杏君と全力で闘えて嬉しいです！もう負けは許されませんからね！」
「まぁうまくやるさ。」
互いに笑うと、試合終了を知らせるブザーが鳴った。
決勝Bブロック3回戦、勝利。

「ところで、その刀に名前あるんですか？」
「え、一応あるけど。その剣は？」
「これは一応『鋼鉄の剣』っていう店に売ってそうな感じです。」
「まぁ特に装飾とかないもんな。」
試合終了後、4回戦が始まる間に竜と主に服装類（スキン）の話で雑談をする。竜の剣は確かに

何の変哲もないフツーの鋼鉄製の剣だ。比べて俺の刀は柄が緑、刀身には風を模した数本の波線が刻まれている。
「杏君の刀は結構凝ってますよね。聞いた話だと、相当ハッキリイメージしないと正確な武器の形にならないみたいですけど。」
「あー……。」
「ま、そういう趣味もあっていいんじゃないですか?俺はカッコいいと思いますよ。」
「ありがとな……。」
「で、なんて名前なんですか?」
「逃がしてくれぇ。」

白と黒

全身を覆う白いローブ。
ローブの下から覗くスーツは白。
背負う槍すらも白く輝く。
『ホワイト』という名がピッタリハマる彼は、立ち塞がる相手を突き刺し、貫き、屠ってきた。
しかし、彼は満足していない。
その強さゆえに。

◇◇◇

「とんでもねぇな……。」

次の対戦相手が決まる４回戦を観ていたが、ホワイトという選手、ヤバすぎる。

予選では１分足らずで３タテ、決勝４回戦も３分足らずで勝利を納めた。実際に試合を観たのは今回が初めてだが、一撃の速さが段違いだった。

対戦相手も速さに途中からついていけなくなり、最後はガラ空きの腹を貫かれてＨＰを全損させた。比べてホワイトのＨＰはまだ８割以上残っている。

あんな強い人は去年はいなかったはずだ。そしたら１年生か……？

ホワイトの正体を考えるがわからない。この学校の生徒なのは間違いないんだが。

なんて考えていると、鞄からチャットの着信音が聞こえる。中から携帯を取り出すと、フブキから連絡が来ていた。

フブキ（（▽（）

＜お疲れ様！試合すごかったよ！

おう、ありがとな。＞

＜腕は大丈夫なの？

なんともない。たまに右手が
あるのかわかんなくなるけど。＞
＜ホントに大丈夫なの?!
冗談だ。で、今度は何に
着替えりゃいいんだ?＞
＜おろ?着せ替え人形の自覚がおありで?
うっせ。そんで要望は?＞

と会話が進んだところで、とあるアニメキャラの画像が飛んでくる。それを見て思わず通話をかける。
『あ、お疲れ様ー。』
「いやお前かい!」
フブキの携帯のはずなのだが、通話に出たのはまつりだった。いやそれはとりあえずいい。よくないが。
「それよりお前、送ってきた画像これ!」
『え?でも男なんでしょ?』
「そうだけども!」

『あ、そろそろ切るね！じゃあねー！』
「あっおい！」
逃げられてしまった。通話画面を切って送られてきた画像をもう一度見る。
画像には、ストーリー上で意図せず女装（厳密には髪が伸びて顔も少し白くなって一見女性に見える男だが。）するハメになったある男主人公が写っていた。
「くっそ、言いなりになってたまるかよ！」
このままではそのうち本当に女装させられかねん。試合が始まるあと5分以内に、あいつらをアッと言わせる服装（スキン）にしてやる！
俺の疲れを考慮して時間を少し遅らせてくれた先生には感謝だ。

◇◇◇

「いひひっ♪」
「まつりちゃんどしたの？」
「フブキの携帯から杏にチャット送ったら電話きてすごい慌ててた。」

「えっ、ちょ！さっきから見当たらないと思ったら！」
　携帯を奪い取り照れる彼女。あぁ可愛い。
「愛川君に変なこと言ってないよね?!」
「愛の告白変わりにしといたよ。」
「ちょーーーー?!?!?!」
　耳まで真っ赤にして急いでチャットを遡る。すぐに嘘だとわかると、半分涙目でポカポカ叩いてくる。あぁ可愛いよフブキ！
　視界の端でニヤつく誠(変態)は無視無視。あ、鼻血噴いた。
「まあまあ。次は杏の女装？が見られるしいいでしょ？」
「「「「女装?!」」」」」
「食いつきすごっ」
　まさか全員反応するとは。

◇◇◇

あまり気乗りしないが、服装（スキン）は決まった。あくまで見た目だけだから特にやましいことなんてない。そう、見た目だけなんだ。

いや、やっぱちょっと落ち着かん。主に周囲の視線が。

ただ画像のままに服装（スキン）を変えてもまつりの操り人形に変わりない。だったらそこから色々加えてやればいいやん、ってなった。そしたらなんかすごいことになった。

髪は真っ黒なロングヘアをストレートではなくポニーテールに。半袖短パンの黒のへそ出しインナーにベージュのノースリーブベスト、ホットパンツ。そんで黒縁メガネと一部の層に人気がありそうな服装（スキン）になってしまった。どうしてこうなった。

観客席を見ると、若干鼻の下が伸びてる野郎共がなんか増えていやがる。中身が俺って知ったらどうすんだよ。気絶か？卒倒か？なんにせよ悪寒が走るわ。

「……。」

そんで対戦相手のホワイトも特にコメントしない。何かしら反応してくれてもいいだろ。

ホワイトは変わらずフードを深く被り、顔は口元しか認識できない。ホントに何者なんだ？かろうじてわかるのは、頭の両端にフードが盛り上がってる部分から獣人か魔人のどちらかってところだ。そんだけしかわからん。

（とりあえず試合に集中だ。）

しゃ!!と声を張り上げて愛刀『疾天(しってん)・隼丸(はやぶさまる)』を抜刀し中段で構える。それを見てホワイトも背中の白槍を両手で構える。

数秒後、試合開始のブザーが鳴る。それと同時に鋭い一突きが迫る。左肩が掠ったがなんとか軌道を逸らせた。お返しに左下からの斬り上げを放つが、身体を捻って回避されて一旦距離をとる。

(いざ相対するとまた違うな……速さもだが、重い!!)

しっかり踏ん張っていなかったら左肩に穴が空いてただろう。それほどに一撃に重さがあった。速いかつ重い。厄介だ。

「はあっ!!」

「ふっ!!」

『刹那』で喉元を狙うが同じ『刹那』で軌道を逸らされる。負けじと押し込んだおかげか、ホワイトの首筋をほんの少し掠らせることができた。いやでもその程度か。厳しいな。

「如月」

「っ?!」

ボソリと呟くと、白槍は冷気を纏い左下から襲いかかってくる。『如月』は冷気を纏いながら右下から斬り上げそのまま一回転して右上からの袈裟斬り、切り返して来た道を戻るように左下から斬り上げ、一回転からの左上からの袈裟斬り、最後に描いた軌跡の

中心部分を刺突で仕留める氷属性の５連撃技。使えるのは刀だけかと思ってたが槍でも使えるそうだ。

刀を引き戻し距離をとって初撃を躱す。迫る２撃目は刀で受け流し、３撃目の斬り上げは胴体を少し斬られたがなんとか回避、４撃目は２撃目と同じく受け流す。５撃目は受け流しても身体のどこかを貫かれる。できるだけ被弾は避けたい。

「ほう!!」

「っつー……ギリギリか。」

選んだ方法は、左手で迫る白槍の先端を掴むという荒技。左の手の平は赤いエフェクトがかかり、鳩尾には白槍がほんの少し刺さっていた。流石の速さに微妙に間に合わなかったが、致命傷は避けただろう。

というか、ホワイトの声。どこかで聞いた気がする。

槍を掴んだまま引き寄せ肘鉄を入れるも左手に受け止められ、槍を離し腹を蹴って再度距離をとる。

学校での交友関係は狭いほうではないが、生徒数が多いためにほとんど話したことがない人も割といる。それでも聞いたことのあるこのスラスラと通る爽やかな声は……。

「何してんですか?」

◇◇◇

まさかのポニテ&へそ出しのスポーティスタイルで来るとは思っていなかったため、何度も目を擦るなり頬をつねるなりして目の前の光景を何度も確認する。ノエルさんとフブキに関しては鼻血出とるし。いや、でも、アレもアリだな……。

「……愛川君ってああいう趣味あったの？」

「……いや、少なくとも俺は初耳。」

「あ”ーーーー!!!!黒髪ポニテのメガネぇぇぇぇぇ!!!」

「……フブキ先輩は一体どうしたんですか？」

「壊れちゃった。」

「いやどういうこと!?」

携帯でパシャパシャ写真を撮りまくるフブキを訝しげに見つめる天音先輩が、背後から登場。はて、生徒会の仕事はどうしたのだろうか。

「あれ、かなたちゃん。生徒会の仕事は？」

「あ、それはとりあえず大丈夫なんです。それより、白海君見てませんか？」

「ルビが……」
「生徒会長？てっきりどこかで仕事してるもんだと思ってたけど。」
「いやそれがですね。朝のミーティング後から全っっっっっ然見当たらなくて。生徒会ほっといてどこで油売ってるんだか。」
　なんと生徒会長の白海先輩が行方知れずだという。前からちょっと自由人だなーとは思ってたが、いくらなんでも自由奔放すぎんか？
「えっちょっとあの美人誰!?」
「愛川君です。」
「うぇえ?!」
　天音先輩は試合場の杏のアバターを見て同じ反応をしてなんとも言えない顔をしている。
　と、その時杏がホワイトから距離を取り、何か会話するとホワイトは自身が纏うローブに手をかけ、バサッと脱ぎ捨てた。
　ローブに隠されていた姿は、学校の制服を真っ白にしたものに、同色のサラサラな髪の毛。そして頭にある種族特有の２本の角。
　天音先輩の探し人が、本来いるはずのない場所に立っていた。

ＶＳ白魔

「何してんですか？生徒会長。」
「いや、それ君が言う？」
「たしかに。」
目の前のホワイトという人物。なんとなーく聞き覚えのある声だな、と思って聞いてみたけどどうやら正解だったようだ。特大ブーメランが返ってきたがそれは一旦置いといて。
フードの下にはサラサラな白髪と、魔人の象徴である角。そして何より非常によく整った顔立ちのイケメン。ホワイトの正体は生徒会長の白海先輩だった。
本来なら大会に出場できない白海先輩がなぜこのフィールドに立っているのか。生徒会の仕事はどうしたのか。疑問は尽きない。

「生徒会役員って大会に出場できませんでしたよね？」
「ホントはね。実はこっそりエントリーしてたんだ。俺もリベンジに燃える男だからね。」
「リベンジ……ってココさんのことです？」
「当たりぃ。去年は決勝トーナメントの初戦でボコボコにされたからね。」
　言われてみれば、去年の決勝トーナメントの一回戦はココさんと白海先輩だった。なーほーね、と思いつつも疑問が残る。
「あれ、そしたらなんで生徒会に入ったんですか？生徒会役員が出れないの知ってましたよね？」
　去年の秋頃、次期生徒会役員選挙が行われ、生徒会長に立候補して見事な演説で当選したのが白海先輩。大会の参加条件を忘れるようなポンではないと思うが。
「いやぁそれがね。当時そのことをすっかり忘れてて。進級してから気づいたのよ。我ながらポンコツだと思ったね。」
「えぇ……。」
　速攻でフラグ回収しないでもろて。
　まさかのポンに困惑していると、観客席に視線を向けた白海先輩が「ＹＡＢＥ」と言って白槍を構え直す。視線の先には応援団フブキ達……の後ろにいるかなたさん。お

そらく白海先輩を探していたのだろう、ものすごい顔をしている。怖えぇ。っていうかアキにメルにわためぇ……応援団増えてない？

「そんなことよりほら、ちゃちゃっと終わらせるぞ。」

「あと8分もあるんですよ？もうちょっと楽しみましょうよ。」

「残念ながらそうはいかないな。天音が来るまで時間稼ぐつもりだろ？」

「ありゃバレた。そしたら棄権すればいいのでは？もう身バレしてますし。」

「それはヤダ。」

「うぉあっ!?」

頑固に拒否したかと思えば唐突に槍を突き出し不意を突かれる。かろうじて躱したが左脇腹を少し抉られた。あ、これ躱してねぇ。掠ってんだ。

不意打ちならぬ不意突きを避けるも追打ちをかけるように横薙ぎが迫り、それを刀を縦にして正面から受ける。

「以外とせっかちだったりします？」

「俺がホモだってか?!やめなー！」

「何も言ってませんけども!?」

喉を出かかって飲み込んだのになぜそれを言っちゃうの。テレパシーか何か？

「顔に書いてんぞっ!!!」

「嘘ぉ!?」
　いつの間にか試合が再開し、刀と槍の攻防がまた始まる。かなたさんが来るまで2分もかからないだろうが、その間に試合が終わってしまうかもしれない。今回はおそらく無効試合又は俺の勝ちになるかもしれないが、今ここで負けるのは勘弁。せっかくなら勝って今後にいい流れを作りたい。
　手っ取り早くするならコレか。上手くいってくれ。

◇◇◇

　天音関係でたまに会ったりしてるから顔見知りではあるのだが、まさか正体を暴かれるとは。中々侮れんなぁ。
「はぁっ!!」
　彼は一旦距離をとり愛刀に白い光を纏わせ、下級技の『光刃(こうじん)』を様々な角度で5……いや6発放ち『光刃』は一直線に俺に向かってくる。
「甘い!!」
（だがその程度のものは簡単に対処できるぞ。）
　白槍『ミニアド』を迫る『光刃』に対して垂直に斬り、6発全て叩き折……れなかっ

た。

『キィィン!!!』

「なっ?!」

擦り合う金属音。先までとは違う質量感。

手応えからして、5発目までの『光刃』は間違いなく技によるものだった。しかし6発目の『光刃』は、彼の刀そのものだった。技だけでなく、武器さえも囮にしたのだ。

そして武器を手放した彼は、『光刃』と愛刀の影に隠れ金色に輝く右の拳を握りしめて迫ってきていた。というか、もう懐に入られた。もう避けることは叶わない。

「……ははっ。」

油断していたわけではない。むしろ自分の強さに驕り、慢心していたのだろう。横に回避するなりすればそれに気づけたはずなのに。

彼の放とうとしている技は上級格闘技の『ジャスティス・ブロウ』。捻るように繰り出すその拳から何倍もの大きさの鉄拳が飛び出し、威力もさながら吹っ飛ばし力もある。

彼の狙いは時間稼ぎではなく、短期決戦。しかも決め手は場外による失格とは。いやぁこれはやられたな。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」

声と共に腹部に黄金の鉄拳が現れ、ワイヤーで急に引っ張られたような感覚と、身体

全体で受けた衝撃と共に特殊固有空間を追い出され、宙を舞う。
「おぶぉあっ!?!?!」
　どう受身をとろうか考えていると、誰かに襟首を掴まれて情けない声が出る。顔を上げると白い翼を広げ呆れた顔の悪魔(天使)がいた。
「……いやぁ負けたわ。あんなブラフに気づけないとは、俺もまだまだだな。」
「……」
「と、ともかく彼には次も頑張ってほしいところだね。次の相手は……ああ！百鬼の令嬢か！いや楽しｍ」
「おめぇもう喋んな!!!」
「ごぉっ?!」
　天音の無表情が怖くて色々語ったが効果はなかった。襟首を持ってないほうの拳で脳天を殴られてからはよく覚えていない。

◇◇◇

白海先輩を場外にぶっ飛ばすトンデモ作戦。なんか色々考えた風に捉えられてる気がするけどそこまで深く考えてません。まぁ結果的に上手くいって良かった。白海先輩が飛んでった方に、普段は温存してる天使の翼を羽ばたかせたかなたさんが追っていったから生徒会の方もなんとかなるだろう。あ、殴られた。

そうそう、あえて竜には説明しなかったが、フィールドがある以上、場外反則的なものももちろんある。といっても内容は試合中に2回場外に出ると失格扱いになるってだけだが。

「……ま、そーいう日もあるさ。昼からの準決勝も頑張れよ。」

ともあれ試合はホワイトこと白海先輩の失格……というか棄権により俺の不戦勝となった。いや、不戦ではなかったけど。普通に疲れたが。

審判の先生に労いの言葉をもらい、竜に試合のことを熱く語られながら昼休憩を挟みに応援団のいる観客席へと戻る。

「「お疲れ様ーー!!」」

「おー、サンキュー。」

「うへぇ、余ぉ疲れたぁ。」

「あやめもお疲れ。」

「それじゃあ各々昼食！準決勝は13時半からだからね！」

「「「「「はーい」」」」」

あやめとも合流し、ミオの一声で一旦解散となった。さて、今日は何を食べようか……。

「あ、そうだ杏。」

「どしたまつり。」

「さっきの女装について聞きたいんだけど。」

「あっ」

ゆるっとダイアリー
お前のハロウィン何味？

この学校はちょっと変わっている、と思ったのはちょうど1年前。武術王、魔術王決定戦はまた別だが、クリスマスとかの世界的イベントを学校規模で好んで行うのだ。

ハロウィンも例に漏れず、１０月３１日の今日一日のみ、授業は通常通りあるが例の合言葉を教師陣に言うと、お菓子かそれに相当するモノをもらえるという学生にとってはｆｅｖｅｒ　ｄａｙになっている。逆に言うと教師陣の負担が半端ない日でもある。特にちょこ先生は涙目で配るもんだから罪悪感がある。それもまたいいが、流石に可哀想なので俺は遠慮しておいた。中には自ら悪戯を好む教師もいるとか……。この学校大丈夫か？

ま、そんなわけで今日は鞄にお菓子がまあまあ入っている。今日の授業も終わり、学

校でのｆｅｖｅｒ　ｄａｙはもう終わりを迎えようとしている。ただし俺の場合はここからが戦場と言ってもいい。理由はお分かりだろう?

「杏ー、なんかお菓子ちょーだい。」

「もう少し可愛く言えないのかお前は。」

もはや日常の一部と化した来客。今日も学校から帰るとすぐにインターホンが鳴り、勝手にドアが開いたと思ったらシオンがブツ(お菓子)を寄越せと言わんばかりに右手を差し出してきた。渡すこと自体に不満はないがせめてｔｒｉｃｋ　ｏｒ　ｔｒｅａｔくらいは言って欲しい。

内心文句を言いつつも、この時のために買いだめしておいたお菓子を渡す。菓子棚からチョコ玉を1箱取り出してシオンに渡すと、一瞬嬉しそうな顔をするがお菓子が気に入らなかったのかぶー、と文句をを言う。

「えぇー、シオンチキンナゲットが良かったなー。」

「ここはＷａｃ(ワクドナルド)じゃねぇ。」

「ま、仕方ないからもらっといてあげるー。」

俺の下腹部に紫色の魔法陣を一瞬展開させるとそれで本人は満足したのか、箒に乗って帰っていった。上着を捲って下腹部を確認するが特に何かされたわけでもないようだ。なんなんだ。

「「先輩ー！」」

シオンの謎行動に？を浮かべていると早くも次の来客が。ドアを開けるとねねポルがキラキラした目でこちらを見ている。

「今日は先輩からお菓子もらえる日だって聞きました！」

「ちなみに誰から？」

「トワ様。」

「あの人は……。」

俺を困らせたいだけだろ。そういうとこ悪魔。また菓子棚から2個入りのペェの実を2袋出してねねポルに渡すと、元気にお礼を言ってスキップしながら帰っていく。おまるんなんて尻尾振ってたぞ。可愛い後輩達だ。

さて俺も何か食べようとした時、また来客が。ドアを開けると上級生の悪魔と天使が俺を見上げるように立っていた。

「こんかなたー。愛川君お菓子はー？」

「こんやっぴー！悪戯していいー？」

「直球ですね。」

また菓子棚を開けてチョコペェを一つ取り出してかなたさんに渡す。トワ様には筆箱から出した油性ペンを渡して右の手の甲を差し出す。

「え、愛川君これどういうこと?」
「そのままです。ｃｏｍｅ　ｏｎ　ｔｒｅａｔ。」
「良かったねートワ。悪魔的所業の見せ所じゃん?」
「去年もそうだったじゃん!何?トワにはお菓子あげる価値がないってこと!?」
「いや、俺がトワ様の悪戯を受けたいってだけです。」
「えっキモ。」
「どうも。」
「強い。」
　なんだかんだ言いつつも手の甲に落書きをしてくれるトワ様はマジ可愛い。そういうとこやぞ。はい、とペンを返されて手の甲を見るとトワ様のサインが書かれていた。これは……。
「トワ様の眷属になったみたいですね。」
「うぇ、あそっか……。」
　自分のやったことを考えトワ様は何を思ったのか、俺の右手を掴み手の甲を一発ペチンと叩くと「じゃあね!」と帰ってしまった。それを追うようにかなたさんもいなくなり、なぜ叩かれたのかわからない俺だけが取り残される。もしかしてトワ様恥ずかしくなったった?

トワ様の可愛さを再認識したところでまた来客。ドアの向こうには夏色吹雪。
「あいよ。」
「トリトリ!!」
「お菓子はねぇのら！」
「断定すんな。ちゃんとストックしてっから。」
フブキはルーナ姫の真似をなぜしたかわからんからスルー。もはや開けっ放しになってる菓子棚から原氏パイを2袋取り2人に渡す。すると俺の右手の落書きに気づいたフブキが何か物申したいことがあるようで、ジローッと半目で見つめてくる。
「えと、白上さん？」
「杏君、右手のサインは何？」
「トワ様の悪戯。」
「ふーーーーーーーーん……。」
「お、ペンあるじゃん。悪戯しちゃお！」
「えっ、まつりおい！」
「フブキ両腕押さえて!!」
「あいよぉ!!」
妙に息の合った連携で上着を脱がされ、両腕を押さえられる。下手に動くと何される

かわからない、というかフブキの顔が近いためジッとする。すると頸の辺りにペンで何か書かれる。これは……サイン?なんでまた。
「あ、もうちょっと屈んで。」
「あっハイ。」
　微妙に書きにくいみたいだから言われた通りにする。
「はい、フブキ。」
「ん。」
　描き終えるとペンはまつりからフブキに、変わらず両腕は押さえられたままで、左頬に落書き……いやこれもサインだな。どうして。
　キュキュッ、と描き終えるとようやく解放される。これで右手の甲、左頬、頸の3ヶ所に3人のサインが書かれたことになる。
「でなぜサインを書いたんだい?」
「杏を自分のモノって宣言してるようなものだからねぇ〜。トワちんが意識してやったのかはわからないけど。」
「あー……やっぱ?」
　いや確かにその線も考えたけども。俺に限ってそんなことはないだろうと高を括っていたが、多少なりともそういうのはあるようだ。別にそれが嫌というわけではない。

むしろありがたいくらいだ。ただ中学3年までの間で4回失恋を経験してるためその辺の感情がわからなくなってしまっているのが少しアレだが。どうも反応に困る。
「あと寄せ書きとかでも自分の名前書くでしょ?」
「俺は色紙じゃねぇのよ。」
そんなこともないのかもしれない。
じゃーねー、と夏色吹雪が帰るのを見届けてドアを閉めてハッとする。これじゃｔｒｉｃｋ　ａｎｄ　ｔｒｅａｔやんけ。あいつらだけなんか得しやがった。今度は俺がサインでも書いてやろうかと思った矢先にまたインターホンが鳴る。ホント今日に限って来客が多い。
ドアの向こうには……ってあれ?誰もおらんの?まさかこの時代にピンポンダッシュか?
と思った矢先、目の前に青白い鬼火が湧く。急に湧いたもんだから流石にビビる。と同時に悪戯の犯人も判明。しばらくしてこなかったからすっかり忘れてたわ。
「いい反応いただきましたぁ!」
「お前このっ。」
階段の陰からひょっこり顔を出したあやめのおでこを人差し指でツンっと小突くと、「あだっ」と小突かれたおでこを抑えて不服そうな顔をする。いや、先に仕掛けたのそっ

ちよ?

「あーあ、お菓子あげようと思ってたのになー。悪戯されちゃあしゃーないなー。」

「あぁぁ!!ごめん!ごめんなさい!許してよぉ……」

すでに用意していたピーチ味のグミ一袋をチラつかせると、手の平ドリルで縋ってくる。よほどお菓子が欲しいのか手を伸ばしてくるのでグミを高い位置に持っていくと、ついていくようにあやめの手も上に伸びていく。はっはっは、かわ余。てか近い余。

「まぁ別にいいんだけどさ。ほい。」

「え、いいの?!やったぁ!!」

特に問題ないためグミをあやめに手渡すと、嬉しそうにぴょんぴょん跳ねる。ちょっと前にミオに「あやめに少し甘くない?」と言ったが俺も人のこと言えないかもしれん。まぁ可愛けりゃええか。

「お?ほっぺたどうした?」

「さっきフブキにやられた。あと頸がまつり、手の甲がトワ様に。」

「じゃあ余も書くー!」

「うっそだろ。」

「箔押しと直筆どっちがよい?」

「２００％直筆。てかポストカードじゃねぇよ。」

フブキのサインに気づいたあやめが書きたいと言うので渋々了承。一体どこに書くのやら……いやおでこかい。

「さっきつつかれたお返しだよー。」

いやさっきのは鬼火の仕返しだったんだが、と言いかけて飲み込む。たぶんキリがない。あと顔近いって余さん。

「はいオッケー！ばいばーい！」

サインを書いて大満足したあやめはご機嫌に鼻歌を歌いながら帰りましたとさ。結果、ｔｒｅａｔ　ａｎｄ　ｔｒｉｃｋ　ａｎｄ　ｔｒｅａｔとなりよくわからんことになった。終始可愛いからもう別にいっか。

「愛川君お菓子あるのらー？」

「先輩、ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　ｔｒｅａｔです！」

「愛川様ぁ～……お菓子を恵んでくださいぃ～……」

「杏君お菓子ーー！」

「悪戯しにきたよ～。」

「かぷかぷされたいイケナイ子は誰かなー？」

と1人又は2人の来客が絶えない時間が30分以上続いた。ちなみに上のセリフは上からルーナ姫、るしあ、ちょこ先生、ノエルさん、おかゆさん、メル。他にもころねさんやぼたんさん、ミオにあくあなど本当にたくさん来た。AZKiさんが来た時は流石に心臓が飛び跳ねそうになったが。というかあれから身体中にサイン書かれるのだが?だから色紙じゃねぇんだって。

「すいちゃんはー?」

「今日も可愛いー!」

もう何人来たのかわからなくなった頃に、すいちゃんも来訪。お決まりの挨拶をしてチョコチップクッキーが5枚1組入ってるケースを渡すと、お返しのように2枚のチケットがすいちゃんの鞄から出てきて、そのうち1枚を渡される。中身はテーマパークの入場券だった。

「んぁ?すいちゃん、これ『revocパーク』の入場券?」

「そう。お姉ちゃんと行く予定だったんだけど、急用入っちゃってさ。折角だから誰か誘いなってことだったから。」

「え、それで俺と?そらとかおまるんって予定合わなかったん?」

「そーなの！なぜかみんな予定入っててさ。しかもこれ有効期限が今週いっぱいまでだし。」

「行くなら今週土曜か……。」

確か土曜は俺とすいちゃんは非番のはずだ。それに月一のパーティーはつい先週やったばかりだから特に何かやる予定は今のところない。しかしそらはともかくおまるんとかも予定が入ってるとはなんとタイミングが悪い。俺は別にいいんだがすいちゃんはどうなんだ……？

「……すいちゃんが良ければ、土曜日行くか？」

「えっいいの!?」

「お、おう。俺は構わないよ。」

すいちゃんは嬉しそうに詰め寄ってくる。近いです。なんか今日距離感近い人多すぎひん？

「やった！そしたら今週土曜日、駅に集合ね！」

「おっけ。時間は？合わせるよ。」

「朝9時集合！丸一日使って遊びまくるからね！」

「土曜日朝9時に駅集合ね。了解。」

携帯のメモ帳に詳細をメモしてチケットをもらう。白と水色と青の斜線が引かれた

チケットを財布にしまい、用件が済んだとのことですいちゃんも帰るようなので玄関先で見送る。
「じゃまたな。」
「うん！じゃあね！」
心なしか足取りが軽そうに見えるが気のせいだろう。完全に見送りを済ませて部屋に戻りしばらく待つが、来客の気配はない。どうやらすいちゃんが最後だったようだ。
土曜にすいちゃんと2人でテーマパークに。……あっ、これデートってヤツ？
「……。」
……いや、変に意識しない方がいい。じゃないと落ち着かない。とりあえず風呂入って整理するか。
ひとまず風呂に入るために上着を脱ぎ捨てて上裸になると、へその下に変な紋様があるのに気付く。下も脱いで下腹部を確認すると、紫色の字でサインが書かれていた。犯人はあの魔法使(クソガキ)いだ。あのとき遅効性の魔法かけてやがった。
「てかなんでココにやりやがった！色々ギリギリだぞ！」
もちろん他のサインと同様に、洗えば薄くはなれど完全に消えるのに3日かかった。
身体中のサインについては消えるまでの間クラスメイト達に「どういうことや！」と

質問責めにされるのが目に見えたため、必死に言い訳を考えるハメになったのは言うまでもない。

◇◇◇

「いひひっ♪」

沈みかけの陽を背にご機嫌な星が住宅街を駆けていく。胸中に秘める想いは一体なんだろうか。知り得るのは当人である彼女だけだ。

楽しい想い出と心地良い目覚めを

今日は１２月２４日のクリスマスイヴ。クリスマスシーズンは今や大切な人と過ごす日、なんてイメージがついたこの時期は人々の心がほんの少し浮つく。街や一部の住宅は電飾で彩られ、様々な色のコントラストが街中をクリスマス色に染めていく。

『ごめーん！クリスマスはまつりちゃん達と過ごすんだー！』

『すまんなー。珍しくスバル達と用事があってなー。』

『杏君ごめーん！その日はマリン達と出かけるんだ～。』

『あー、ココ達とまたタコパすんだよねぇ～。ごめんね愛川君ー。』

『ごめんねせんぱーいｗねね達ししろんのお店貸し切ってパーティーするんだぁｗ　』

『助手君ごめんねー。ｈｏｌｏｘのみんなでご飯に行くんだよね～。』

そんな中、表情は明るいが足取りがほんの少しだけ重い男が駅前のショッピングモールで晩飯の買い出しをしていた。そう俺や。愛川杏や。特に期待とかはしていなかっ

たが、フブキ辺りのメンバーとクリスマスパーティーしないか、と聞いたところ前述のとおり見事にみんな予定が入ってるようだった。メンツを聞けば綺麗に5人組でクリスマスを過ごすらしい。そらやすいちゃん、みこちも家族と過ごすと言ってたし、ＡＺＫｉさんはクリスマスライブで遠征してるらしい。みんな忙しいんだな。あと煽ってきたねねちは覚えとけよ。

　幸いにもミオと学校の高性能ロボットのロボ子さん、ころねさん、おかゆさんの計４人の予定が空いてたらしく、このメンバーでパーティーをすることになった。ちなみに３日前から冬休みに入っているため誠も帰省してていない。

「お、ローストビーフ美味そ。」

「いいじゃん！買っちゃおう！」

「じゃあちょっと大きいやつ買おっかー。」

　そんなわけで昼過ぎのまだ日が高いうちに買い出しを済ませちゃおうと思っている。ころねさんはいつも通りパン屋、おかゆさんは夜勤あがりのため夕方から参戦する予定だ。ミオは言わずもがな、ロボ子さんも教員というわけではないため、特にすることがないらしく買い出しを手伝ってくれている。非常に助かってます。

「あとは……大丈夫そうかな、お菓子はストックしてあるし。」

「お、用意周到～。」

「いっつも誰かしら凸ってくるもんでね。」
「常習犯にはウチからよく言っとくよ……。」
「いや、俺も退屈しないから別にいいんだけどさ。」
　携帯を取り出したミオを制しつつ買い物籠の中身を見て買い忘れがないのを確認すると、レジの待機列に並びサッと会計を済ませる。持参したエコバッグに買ったものを詰めて食品売り場から出ると、帰る前にミオとロボ子さんがお手洗いに行くらしく、そばにあった手頃なベンチに腰をかけてふぅ、と息を吐き2人を待つ。
（んんんん可愛い……）
　モールの通りを行き交う人々をボーッと眺めつつ2人の格好を思い出す。ミオは両肩から髪をおろしていて、普段はロングのロボ子さんも緩いウェーブがかかったショートヘアとなんとも可愛らしい髪型で手伝ってくれている。いや、もちろん服もとても可愛らしいのだが、俺の語彙力じゃ言い表せん。とにかくええぞ。
「お、杏ぺこじゃん。あんた何してんのぉ?」
「んぁ?」
　聞き覚えのある声が背後から聞こえて振り向くと、白いセーラー風の服を見に纏うショートヘアの兎がいた。一瞬誰かわからなかったが、語尾でハッとする。
「……あぁぺこーらか。」

「今一瞬誰？って思ったぺこだろ。」
「あぁ。ショートだからわからんかった。」
「でっしょ～!!ぺこちゃん雰囲気変わったっしょ！」
「おう、似合ってるぞ。」
普段がロングか人参が刺さってるツインテだから、首から下に髪がないのは新鮮でいいと思った。口には出さんが可愛いと思うぞ。
「で、あんたは何してんの？」
「買い出し。今はミオとロボ子さん待ち。」
「あーなるほどねぇ。」
「ぺこーらはノエルさん達とだろ？プレゼント探しか？」
「あとはマリリンのだけなんだよね……なんかいいのある？」
「孫の手でいいと思うぞ。」
「アッハッハッハッハｗｗｗｗｗそれにしとくかぁ!!」
名案とばかりに笑いながらぺこらはマッサージ器具コーナーがあるであろうブースへ行ってしまった。脳死で言っといてなんだがせめてもうちょいマッサージ器具してるやつの方がよくね？まぁ買うのはぺこらだから俺のせいじゃないよねー？
その後すぐにラッピングされた袋を持った２人と合流。あえて中身は聞かずにバス

に乗って帰宅し、休憩がてら『マルオゴーカート』で2，3戦遊んで晩飯の用意をする。あとタイガとたわちゃんに会いに行った。癒されたわ。

「さて、今晩ボク達がいただくのは豆乳鍋です。」

「ユーバーしません。これから作るんですよ。」

「わかってるよぉ。」

ロボ子さんの冗談はさておき、ミオと分担したながら水洗いした1／4カットの白菜、人参、長ネギをそれぞれ程よい大きさに切り、白滝は中の水分を捨てて一旦タッパーに移す。そして鍋に豆乳鍋の素をぶっ込み加熱、沸騰寸前でさっき切った人参、白菜、ネギを入れて煮込み、少し遅らせて豚肉を投入しさらに煮込む。灰汁を取りつつ2～3分経ったらスープの味見をする。ちなみにロボ子さんに予約炊飯でちょうど炊き上がった白米を混ぜてもらっている。助かる。

「おぁよ～!!」

「おじゃま～。」

グッドタイミングでおかころの2人が到着。ふと外を見るともう陽は沈みつつあり、夜になりかけていた。2人の上着や頭に少し雪がついてたことから、雪を降り始めているのだろうと把握できた。まぁロボ子さんから積もっても2，3ｃｍだろうと聞いてるから問題はないだろう。

「ちょうど良かった。鍋の味見します？」
「やったぁーー!!」
「熱いんで気をつけてくださいね。」
　小皿にスープをほんの少しとってころねさんに渡す。フーフーとある程度冷ましてから味見をすると、顔の周りにキラキラが見えるくらい「うめー!!」といい反応をいただいた。これは作りがいがあったな。
「ちょいと冷蔵庫借りるよー。」
「おかゆ、それって……。」
「ん？お酒だよ？あ、そっかぁ。ミオちゃんと杏君はまだ飲めないもんねー。」
「あと3年待ってくれれば一緒に飲めますんで。」
「じゃあ楽しみにしてるね～。」
　おかゆさんがレジ袋から缶のサワーを5本くらい取り出し冷蔵庫の空いてるスペースに入れていく。俺も酒が飲める歳になったらビールとか挑戦してみたいなと思っているが果たして……。
　味見もOKとのことで、鍋はまだ少し温めつつ皿の用意をする。底が深めの丼とご飯茶碗を5つ、箸を5膳取り出し整頓した食卓テーブルへと持って配り、鍋敷きの上に豆乳鍋を置く。慌てず運び火傷しないようにタオル越しに蓋を開けると、白い湯気が立ち

昇る。湯気が晴れると中からとても美味そうな具材達が顔を出す。
「「「おぉ～～!!!」」」
「こりゃ上出来かな。」
　さらに冷蔵庫からローストビーフなどのサイドメニューも取り出して並べる。うん、いい見栄えだ。記念と自慢するために写真を1枚パシャリ。あとで誠にでも送ってやるか。
「じゃあみんな揃ったということで！」
「「「「メリークリスマス!!!」」」」

◇◇◇

ピコンッ
「ん？」
　夜も更けて２０時を過ぎた頃。〆のうどんを追加してみんなの腹が膨れてきて、満足した者はゲームに手を出し始めたくらいの時間感覚だな。そのくらいのタイミングで

携帯の通知音が鳴り、ロック画面を見るとまつりから写真が送られてきたようだ。
「……ほぉ?!」
「え、どしたの?」
「まつりから写真が送られて来たんだけど……」
「おー!みんな可愛いじゃーん!!」
突然の爆弾にとてもびっくりした。ロボ子さん達に届いた写真を見せる。写真の中身?まつり、アキ、はあと、メル、フブキの1期生メンバー（なぜ1期と呼ぶのかはわからんが）のサンタ&雪だるまコスプレ写真だった。コスプレ衣装は鎖骨が出てメルやはあとに関しては谷間まで見えるまあまあ攻めたもので、可愛らしさとエロさが見事に共存している。フブキに関しては頭に雪だるまの被り物をしていてよくわからんがそれがまたいい。みんなカメラ目線でとてもいい笑顔だ。あ、もう1枚来たぁァァァ!?!?!今!雪だるまの被り物がないフブキの写真が届いたが恥ずかしいのか赤面している!!ま つりいい仕事したぞ!!!（即保存）
その後それぞれ個人の写真が1枚ずつ届き、最後に「やっほー☆」とだけ送られてきた。とりあえず豆乳鍋の写真を投げて「めっちゃ可愛い」と素直な感想を言う。「ありがとー♡」とまた可愛らしい返事をもらい心なしか頬が緩む。
「むー……。」

それから息をつく間もないスピードでシオン、ノエルさん、トワ様、ねねち、こよりんからそれぞれのグループのサンタコスの写真が送られてきた。え、眼福すぎて死ねるが？ってうわぁぁぁぁ追加でそら、えーちゃん、みこち、すいちゃん、ＡＺＫｉさんからもキタァァぁぁぁ!!!!!（悶絶）

「ちょっと杏～。目の前にボク達がいるってのに他の子に浮気かー？いい度胸してんねー？」

「何のためにミオちゃんがじゃんけんで勝ったのかわからないよねー？」

「ちょっおかゆ!?」

「えっそれはどういう……」

「実は～……」

……。

えー、要するに俺とクリスマスパーティーをするグループを決めるためにそれぞれ代表でじゃんけんしようってなって、フブキ、あやめ、ノエルさん、トワ様、ねねち、こよりん、すいちゃんを負かして結果的にゲーマーズ代表のミオが勝ったと。ほんでミオ、ころねさん、おかゆさんにぼっちは嫌だと泣きついたロボ子さんの４人とクリスマスパーティーをすることになったらしい。

「どうりでみんな予定が入ってたわけだ。」

「うぅ……」
「じゃあこぉね達も着替えよっかー。」
「そうだねー。」
「そういうわけだから、コンビニでお水とアイス買ってきてくれる？お金は渡すからさ。」
「奢りで買ってきます。では。」
「はやっ。」
「正直。」
　この４人のサンタコスが拝めると分かれば即行動。財布を持って暖かい格好に着替えて外に出ていざコンビニへ……おろ？ドアが開かねえ。いや、開きはするんだがミリ単位でしか動かねえ。なんだこの重さは。
「……ロボ子さん？」
　窓から外の状況を確認すると、夕方の雪に風が追加され、更に吹き溜まりによってドアが実質封印されてしまっていた。パーティーが楽しくて全然気づかなかったが、外というか玄関周りはエグいことになってるみたいだった。自分で天気予報を確認していなかったのもあるが、これはいかがなものかと。
「いや、ボクも流石にそこまでは読めないよ?!」

「ありゃ～、こりゃ外に出れないね。」
「じ、じゃあ別に着替える必要ないよね？スペースもないし……」
「しゃーないな……」
「うんうん、じゃあ、」
「ちょいと雪かきしてきます。終わったら携帯に連絡ください。」
「うえぇぇぇぇぇぇぇぇ!?!?」
「じゃあミオもお着替えしようね～。」
「逃がさないよミオしゃ!!!」
「ちょ、恥ずかしいって！ちょぉぉぉぉ!?!」

４人のサンタコスを見るためなら当然の労力だ。喜んでやるさ。というか、これほっといたら一生玄関から出れない気がするから流石に一回やっておく必要がある。雪国育ち舐めんな。あとミオは余程恥ずかしいのか抵抗して……あ、もう逃げれないっぽい。

俺が出ないと着替えられないだろうから、気合いでドアを押し開けて雪かきを開始。気温自体は－４℃とそんなに低くない。風も少し強いから荒れてるように見えるが雪の量は少ない。一応ある駐車スペースには５…いや７ｃｍは積もっているところを見るに、今回は本当にピンポイントで吹き溜まりになったようだった。うーんついてない

が感謝。
特に急いだわけじゃないがすぐに雪が片付いてしまったため、ラミィさんの部屋のドアの前やミオの部屋がある2階の足場と階段などもついでに雪かきしておく。
全体的に片付けて階段を降りようとしたタイミングで携帯から通知音。ロボ子さんから「いいよー」と連絡があり足早に部屋に戻る。やっぱ室内はあったけぇなぁ。
「お、お疲れ様……」
「お……おう。」
出迎えたのはサンタコスのミオ。まだ恥ずかしいのかもじもじしている。というか破壊力が違う。衣装自体は他と変わらないが、個々が持つ魅力は健在でとても……美しかった。
「おおお風呂沸かしてるから、一回あ暖まったら?」
「……ぁ、ありがとう……その……」
「……?」
「き、綺麗だよ……似合ってる。」
「ええ?!?!」
とりあえず口で伝えたいことを伝えられたのでのぼせるかもしれんが風呂で一度暖

まることに。

結局少しのぼせて風呂から上がり着替えて居間に戻ると、４人のサンタコスが眩しくて思わず立ち止まる。実物で見るとこんなにも違うか。しかも４人ともナイスバディだから目の保養になる。あざます、あざます……。

この後はなんかスキンシップが増えた４人と『マルオパーティ』をやって、そのまま俺の部屋で寝泊まりしました。ベッドはおかころに占領され、ロボ子さんとミオになぜか挟まれ川の字で寝ることになって俺はよく眠れませんでした。

そのため翌日は一番早起きだったが、ロボ子さんとミオが俺の腕を抱いて寝ていた。２人の柔らかいモノの刺激が強すぎてこれ以上はアカンと俺の脳みそが悲鳴をあげ始めたので、起こさないように脱出して近所を２，３ｋｍ走ってきました。

「ふう……おわぁっ!?」

戻ってきて気が緩んだところで盛大にコケました。普通にいてぇ。

まぁ、トータルで楽しかったからそれでええか。

あとはまだ寝てるであろう４人の枕元に、昨日渡しそびれたプレゼントを置くか。気に入ってくれるかな。

とまらない、こえていく、つながる。

俺達が学校を卒業してからちょうど４年後。

こんな俺でも、なんとか職に就いて社会人として働いている。他のみんなもあれからそれぞれの道に進んでいるが、今でもちょくちょく顔を合わせる程度には友人関係は続いている。むしろみんなの知らない一面も色々見られるようになった。ミオは前よりハジけるようになったし、スバルはなんかより女の子らしくなったし、かなたさんは握力自己ベストを更新したし。誠？誠も相変わらずの変態でありまする。

そうそう、フブキ達は卒業後各々大学に行ったり就職したりしたけど、全員が中学時代の先生が立ち上げた企業のタレントとして活動もしているのだ。ロベさん達男性陣の方も同様。なんとも世界はどうなるかわからんな。

さて、なぜこんな話をしたか。

俺が今いるのは隣町の国際展示場と言われる場所。時折大イベントなどが行われており、全国的に名前が知られている所だ。ここであと数日もすればとある大イベントが行われる。

その大イベントに、フブキ達が関わっているのだ。いや、関わっているというかなんなら出演なんだけど。ともかくそれが個人的にヤバイんだよ。

とあるソシャゲ同様、展示やトークイベントなどが行われる『リアルイベント（EXPO）』と、アイドルが歌って踊る『ライブ（fes）』が2日間に渡って開催されるのだ。

リアルイベントは会社（プロダクション）所属タレント全員の参戦でとてもアツイ催しとなっている。いろんなブースやフード、グッズが発表されていて、ワクワクが止まらない。

ライブに関してはタレント全員出演の全体ライブで、通算3回目となる。過去2回も最高の一言に尽きるもので、とても感動したのを覚えている。特に注目すべきは拡張現実AR技術を使った演出とキアラさん達海外の所属タレントの参戦、そして生バンドによる演奏だ。前回でも充分想像以上だったのに、これ以上越えていったら供給過多で倒れるかもしれん。泣く用意はすでにできてるぞ。

この3回目に至るまでに個人やグループでのライブもあり、数を重ねるごとにファンが増えていくのを感じる。途中で躓くこともあったが、それでもここまで進んできたの

は彼女達の力があったのと同時に、応援してきたファンの力の両方があったからこそだと思う。

「おや、こんなところでどうかしましたか？」

なんて思いを馳せていると、男性に声をかけられた。３月の１７時頃となると陽も沈みかけて街灯も点き始めるくらいの暗さのため、一瞬不審者かと思われるが声ですぐに誰かわかり安堵する。

「どうも。これまでの軌跡をちょっと振り返ってました。とても大きくなりましたね。」

「ええ。僕も正直びっくりしてますよ。彼女達には驚かされてばかりです。」

他にもこんなことがあった、これはとても良かったなど他愛ない話を少しすると、男性は「これからもよろしくお願いしますね。」とだけ言って去っていった。

「俺もそろそろ帰るか。……お、綺麗な月だ。」

俺を含むファンと彼女達タレントとの繋がりは続いていく。

これまでも。

これからも。

共に。

ヒロインオーディション（体験版）

6月中旬、武術王決定戦が無事に終わってから1週間。先週同様、梅雨の季節を感じさせない晴れやかな木曜日の4限。俺たち2年生は学校の2つある体育館の一つ、2号体育館（通称：新体）に集められた。

「この学校ってホントにイベントには全力だな。」

「俺らとしちゃこれでもかってくらい青春できて嬉しいけどな。」

「それ。学校に感謝だわ。」

誠やクラスメイト達と雑談をしながら先生のアナウンスを待つ。話を聞いた感じ、やはりみんなそわそわしているようだ。まぁそれは俺もなんだが。

今2年男子は新体のアリーナ部分の半分に待たされている。フブキやまつり達女子は新体アリーナのもう半分に集まっている。男女の間には『見てからのお楽しみだ』と言わんばかりに白いカーテンがかかっており、男女間のコンタクトがとりにくい状態になっている。

『お前ら聞こえるかー。これから特殊固有空間（フィールド）展開するから、体調悪くなった奴いたら素直に手ぇ上げろよー。』

「おわ、3秒前とか無いんだな。」

「スッときたな。」

紫水先生がアナウンスしてものの数秒で新体全体を覆うようにフィールドが展開された。必然的にフィールドに入った野郎共は白いスーツに着替えさせられた。いや違うわ。タキシードだこれ。横目で周りを見ると、何人か袴姿も見受けられる。

「おー、誠似合ってんじゃん。」

「ほー、馬子にも衣装。」

「お前あとで覚えとけよ。」

特殊固有空間を知らん人のために簡単に説明すると、今実際に着てるのは制服だけど服の見た目がタキシード、袴になっている状態になっている。イメージはクリハン（クリーチャーハンター）の重ね着装備みたいな感じ。

誠に喧嘩売られたのは一旦置いとくとして、男子がこんな格好になったということはだ。女子の方はもう言うまでもない。

はい、今日のイベントはＪｕｎｅ　ｂｒｉｄｅ。対象は2年生のみで、未来に輝く学生に先行体験してもらおうというものだ。フィールド内では和洋両方の花嫁／花婿衣

装を試着でき、あとは好きに写真を撮るなりする時間だ。なんだこの神企画。

『じゃー後は時間まで好きにしてくれー。』

紫水先生は最後にそうアナウンスすると、男女間を隔てていたカーテンが一気に引かれ、向こう側にいる花嫁候補達と目が合う。

純白のドレスや白無垢に身を包んだ彼女たちは、嬉しさと緊張、そして照れが混ざった表情でこちらを見つめていた。互いに3秒ほど情報を処理するのに固まっていると、背後からパシャリとシャッター音が。

振り向くと、紫水先生がどこから取り出したのかガチのカメラを体育館の隅で構えていた。あの人目がガチだ。

紫水先生のシャッター音のおかげで現実に戻った俺たちは、それぞれいつものメンバーで集まって記念にと写真を撮り合う。中にはガチの告白をしてる奴もいた。メンタル強すぎる。

というわけで俺、誠、フブキ、まつりの同クラスいつメンで集まってます。

「2人ともカッコいいじゃん！」

「まつりもいいな。スカート部分の丈が短いのがいい味出してる。」

「でしょー！」

「で、その後ろに隠れてる赤い狐さんは？」

「ひゃうっ」

観念したのか、まつりの後ろからもじもじしながらフブキが現れた。

ウェディングドレスは脚が隠れてギリギリ引き摺らないくらいの丈のいわゆる標準的なものだが、頭の上に乗ってる花冠が良い。加えて照れで耳がへにゃってるのがギャップでより良い。

「綺麗だぞ。」

「あ、ありがと……」

「神企画を用意してくれた学校に感謝ぁ！」

「誠君は平常運転だね。」

「かぷかぷー！」

「ちょこも混ぜてー！」

後ろから別クラスのアキとメル、遅れてぺこらとこより、そして何故かちょこ先生が参戦。多分アキメルにでも釣られてきたのだろう。ぺこらはまつりと同じミニスカートタイプ、こよりは背中が開いて尻尾の付け根が見え……そうな感じと、みんな自分らしさがドレスに現れていてとても良いです。特にメルキスの2人はむ、胸が……。痛い痛い痛いですまつりさん。

「みなさん揃ってますね。」

「お、そらにえーちゃん。すいちゃんも。」
「やっほー！」
「すいちゃんはー？」
「今日は特に可愛いー！」
「ありがとうー！」
「やっぱちいｓ『ゴッ』」
　さらにまた別クラスのそら、えーちゃん、すいちゃんが加わる。そらもすいちゃんもやはりドレスが非常に似合うし、えーちゃんは普段ジーパンなのもあってギャップがありとても良い。最後の鈍い音は恐れを知らないというか、学習しない誠がギリギリ見える手刀ですいちゃんに倒された音。憐れなり。
「フンッ」
「こいつはさぁ……」
「あはは……」
「あれ、ミオさんとあやめさんは？」
「さっきクラスメイトに囲まれて写真撮られまくってるの見ましたよ。」
「あのクラスって一部だとあやミオ推進派クラスとも言われてるぺこ。」
「あの２人もなんだかんだ大変なんかな。」

その後も各々写真を撮っていると、ようやく解放されたのかあやミオが到着。その2人の衣装を見て思わず見惚れた。

着物などの和装が似合う2人のことだから間違いないだろうとは思っていたが、白無垢がこれほどまでにマッチするとは。ミオに至っては白無垢に獣耳ポケットがあることによってより可愛さを引き立てている。

「わぁ!!ミオちゃんもあやめちゃんも綺麗!!」

「やっぱりお2人には白無垢が似合うわぁ〜!!」

「えへへ、ありがと。」

「あれ、誠君は?」

「そこで伸びてるぺこ。」

「なんで!?」

「自業自得。」

あやミオも加えて計13名(内1名気絶)でワイワイしていると、撮影スペースとなっているステージが空いたためそこで撮影会をやろうということになった。あやふぶみなりメルぺこなりメジャーだったり意外なペアで写真を撮っていく。アッ、そらの笑顔が眩しい……。

「いやぁ〜、みんなの花嫁衣装綺麗だなぁ。」

「でも何か足りないんだよね……」
「気づいちゃいましたかまつり様。」
「えっ、ちょこ先生何かわかるの？」
「もちろん！そ、れ、は……」
　え、なんかこっち見られたんだけど。
「花嫁には花婿！つまり愛川様とツーショットよ！」
「!!!」
!!!待って急に寒気がしてきた。役得なのはわかっているが彼女達の視線が一斉にこっちに向けば流石に狼狽えるというもの。いやもう逃げる気なんてないが。というよりこのメンツから逃げられる気がしない。
「ということでぇ！これから愛川様とのツーショットタイムでぇす!!」
「癒月先生、あんま時間ないんで２人くらいにしといてくださいね。」
「えー。」
「えーじゃないです。」
　紫水先生から救いの手が……まぁ無いよりはいいだろう。あざます。ところでその俺に向けられたサムズアップはなんですか。いや、グッ！じゃなくて。
「それじゃ恨みっこなしのジャンケンで決めますか。希望する方はこっちに来てくださ

い。私が審判をしましょう。」
「えーちゃんはいいの？」
「私はそらの衣装が見れて満足なのでみなさんに譲ります。」
「ちょこも皆様の可愛い花嫁姿もっと見たいので～！」
　てことで11人の花嫁が俺の為に争うことになった。これなんてラノベ？
「人数が多いので、ある程度減るまで私に勝った人だけ残る形式にしますか。いきますよー……ジャンケン！」
『ポン！』
　果たして結果は……
「うぇ?!アキちゃん1人勝ちだ！」
「アキアキすごー!!」
「やったぁぁ!!」
「おめでとうございますー!!」
　アキの1人勝ち。どんな確率やこれ。素直にすごいが。
　ともかく、相手が決まったのなら迎えに行くか。
「俺でいいんか？」
「あれあれ？照れてるの？」

「そりゃあ、なぁ。」
「ふふ、嬉しいな。」
「アキ様ー！武術王２位の愛川様なら何でもリクエスト聞いてくれますよー！」
「おい待てそこ余計なこと言うなぁ!!」
　ちょこ先生のアドバイス（無茶振り）を受けつつアキの手を引いてステージに移動する。こうなったらもうやるっきゃないか。
「で、何かリクエストはありますか。」
「え、いいの？」
「あんなとこで言われたら断れんよ。」
「えーと、じゃあ……コショコショ」
「……マジか。別にいいけどさ。」
「よっしゃ！」
　アキからリクエストを耳打ちで聞き、時間も惜しいので早速撮影会をしよう。ギャラリーがいるのがとても恥ずかしいがもうどうにでもなれ。
「いくぞ……ほいっ！」
「きゃっ!?」
　アキのリクエストは、誰もが夢見るであろう『お姫様抱っこ』。抱き上げた瞬間ギャラ

リーからは黄色い悲鳴とシャッター音が。芸能人の会見かな？俺個人としては、いずれはお姫様抱っこをしたいと密かに思っていた。まさかこういう形で叶うとは思わなかったが。

「ねぇねぇ、杏君。」

「な、なんだ、アキ。」

突然名前で呼ばれてびっくりしたが、平静を装いつつアキの顔を見る。同時にぬるっと首に腕を回してきたし、心なしか少し照れてる？

「左手の指……気づいてるよね？」

「……さぁな。」

意識しないようにしてたのに、と内心呟きながら左手薬指にあった指輪を思い出す。フィールドが展開されてから指輪も標準装備として身につけてあったそれにおそらく全員気づいているだろうが、誰一人として話題に出すことはなかった。それを今改めて認識させられたことにより顔が熱くなり、心臓の鼓動が速くなる。できるだけ動揺を見せないようにして相槌を打つも、予想通りの反応だったのか、意地悪な顔をして左手の指で俺の左頬をツンツンしてきた。可愛いなちくしょう。

「素直じゃないなぁ～。うりうり。」

「んぅ」

「……ありがとね。」
「……どうも。」
　互いに貴重な経験をしたところで結局俺とアキの撮影会で４限が終わり、高校３年間でたった１回の行事が幕を閉じた。こんなことやってんのウチくらいだろ。
　なお、アキとのツーショットをネタにトワ様やねねち、おかゆさんなど色んな人に７月に入るまでしばらく擦られました。

邂逅

白上フブキ

地元から離れた高校で新しく友達を作るというのは案外難しいのだ。

だってそうじゃん。幼稚園の頃から付き合いがある同級生がいない環境って結構おっかないぜ？しかも幼稚園とか小学校の時とは色々状況が違うから余計。相手のことをホントに0の状態から知らなきゃいけないから大変なのよ。

そんなわけで、今俺はクラスで浮くのではないかと内心冷や冷やしている。1人だけ知り合いがいるが、残念ながらそいつは別のクラスだ。つまり自力で友人関係を築かなければならない。

そして俺の性格上、自分から初対面の人に話しかけるというのが難易度高めなのだ。つまり受け身で話しかけられるのを待つほかない。これからの学校生活で多少の友人関係は必要になるだろうから、せめて1年生の時に何人か友人を作るべきなんだろうけ

ど……。いや、ちょっと勇気を出せば済む話なんだけどさ。その勇気を出すのに勇気がいるのよ。二段構えなの。わかる？

「あーいみんな、入学式とオリエンテーションお疲れさんー。軽くホームルームやったら今日はもう解散だから、午後は好きに過ごしていいぞー。」

担任の紫水翔先生がホントに軽くホームルームを済ませて今日はもう解散になった。自己紹介は入学式前に済ませてあったため、周りには共通の趣味がある人や同じ中学出身の人同士がわいわい会話している。

友達を作るならとりあえず周りの席から、と思い左隣を見る。うん。いい天気だ。校庭の奥に植えられた桜が満開に咲いている。

次に前。黒板だ。受け皿に何本もあるチョークは長いものから欠けてもはやチョークと呼べるか怪しいものがある。今までに幾度となく使われてきたのだろう。

そんで真後ろ。出席番号だと俺の次にあたる生徒は、教室の後ろ側で同じ中学出身の奴数人と楽しそうに話している。

……もうおかわり、いやお分かりだろう。名前の関係上、幼稚園の頃からずっと俺は出席番号1番だった。『愛川』の前に来る名前と同じクラスになったことなど一度もない。だから必然的に俺の最初の席は最前列の1番窓側だった。それは今回も同様で、また何ヶ月かの間はこの席で勉学に励むことになる。

幸いにも右隣の席の女生徒はまだ座っているようだ。横目でチラリと見ると、狐の獣人が携帯で何か調べ物をしているようだった。普段から手入れをしているのだろう、よく整えられた白い毛並みはまるで雪のように美しい。名前は確か……白上だったか。

さっきも言った通りの性格だからいきなり女子に話しかけるというのもやはりハードルが高い。うーむどうしたものか……。

「……はぁ。」

一旦脳を休ませよう。ひとまず思考を整えるために昨日ツッタカターで見かけたＤＧＯとかいうソシャゲを起動する。

しかしここでやってしまう。携帯のサイレント機能をＯＦＦのままで起動したため、ゲームの起動音が鳴る。本体の音量が下から５番目程度だったため教室中に爆音で響き渡ることはなかったのが幸いだった。

「ねえ、君ＤＧＯやってるの？」

鈴の音を鳴らしたような可愛らしい声が右隣から聞こえ、振り向くと白上が俺の携帯を覗くように立っていた。おそらくさっきの起動音（小）を聴かれたのだろう。

「あ、あぁ。昨日ダウンロードしたばっかだけど。」

「じゃあ初めてなんだ！私もＤＧＯやってるから、色々操作教えてあげるよ！」

「それは助かる。チュートリアルやったけどバトルシステムがイマイチよくわからんく

てさ。」

白上も同じゲームをやってるみたいで色々教えてくれた。とりあえず共通の話題ができてよかった。

「フブキー！いるー？」

一通り教えてもらったタイミングで、廊下から白上を呼ぶ声が聞こえてきた。その声に時計を確認するも白上は立派な狐耳を立ててハッとする。

「あっ、もうそんな時間か！まつりちゃん、今行くー！……じゃあね、愛川君！」

「おう、ありがとな！」

白上は鞄を取って軽く手を振ると、長い尻尾を揺らしながら教室を出て行った。

ひとまず友達……とまではいかないだろうが、今後話しかけやすくなった。これからも仲良くしていけたらいいな。

その日の夕方、部屋を借りてるアパートの前でまた会うことになるとは思ってもなかったが。

◇◇◇

「ねぇフブキ、一緒に話してたのって彼氏？」
「ひえぁっ?!違う違う!!そんなんじゃないよ!!」
「でもフブキ楽しそうに話してたし。」
「ゲームの話してたの！始めたてだから色々教えてあげてたの！」
「へぇー……。」
「なんでニヤニヤするのー!!!」
「あ、アキアキー！フブキが入学初日に彼氏とイチャイチャしてたよー!!」
「にゃぁぁぁぁぁーーーーー!!!!!」

◇◇◇

「愛川君ー。聞いてるー？」
フブキの呼びかけで飛びかけた意識が呼び戻される。

確か今はテスト勉強のためにフブキと図書室に来ていたはず。周りを見ると問題集やノートを広げてテスト勉強をする生徒がちらほら。もちろん図書室では静かにしなきゃいけないため、わからないところは互いに小声で教え合っていた。それがいつの間にかボーッとしてしまっていたらしい。

「悪りぃ、なんも聞いてなかった。」

「もうそろそろ17時になるから帰ろ?」

「うぇ、もうそんな時間か。」

外を見ると日は傾いてオレンジ色に焼けている。今日は15時に授業が終わってからここにいるから、大体2時間は経っている。ちなみにまつりやミオにも声をかけたが、用事があると言われタイミングが合わなかった。

「愛川君、さっきボーッとしてたけど何かあったの?」

勉強道具を鞄にぶち込み図書室から出て生徒玄関に向かっていると、フブキから話しかけられた。

「え、いや特に。」

「そう? ならいいんだけど。しばらく虚空を見つめてたから遂におかしくなっちゃったかと思ってさ。」

「遂にって何だ。今も少しおかしいみたいな言い方すんな。」

「え？違うの？」
「おうコラ。」
「あだっ。」
　何を言うかと思えば軽くディスられた。仕返しとばかりに左手人差し指でフブキの額を軽く小突き、上靴から外靴に履き替える。
「無意識で去年のこと思い出してた。入学式の日。」
「へぇ～。そういえば去年も同じクラスだったもんね。」
「だな。他にも話せるクラスメイトはいたけど、フブキと一番話してたかもな。」
「そうだねー。確かに愛川君と一番話してたかも。」
　学校を出て家に帰る途中、ふと気になることがありフブキの方を見る。俺の視線に気づいたフブキは狐耳をピコっと動かして振り向く。そのピコって耳動くの好きよ。
「……。」
「愛川君？またおかしくなった？」
「またって言うな。フブキってさ、俺のこと名前で呼んだことないよな？」
「えっ。」
「正確に言うなら俺の前では、か。」
「あっ、ちょ、」

おお動揺しとる。耳もピーンと立ってるし。いい機会だ。ちょっと悪戯してやろう。
「知り合ってもう1年以上経つんだからそろそろ名前で呼んでくれないかな～。」
「い、いやぁ白上にはまだちょっと早いかなって……。」
「でもミオから聴いたぞ？『2人で通話してる時は名前で呼んでる』って。」
「ミオーーーー!!!何バラしとんじゃー!!!」
夕陽に照らされてなのか、はたまた恥ずかしさからなのかフブキの顔は赤く染まり、どういう感情なのか尻尾はブンブン左右に振っている。
「なんかまだちょっとフブキと距離を感じるんだよなー。」
「えっと、その、うぅ……。」
おっと、少し意地悪が過ぎたか。可哀想は可愛いとも言うが、このくらいにしておくか。
「悪りぃ悪りぃ、ちょっとからかっただけだ。気にしなくていいぞ。」
「……うーーー!!!愛川君の意地悪ぅー!!!」
「ごめんて。」
真っ赤な顔はそのままでうーうー言いながらポカポカ叩いてくる。はっはっは、愛い奴よの。
「フブキ、ごめんてー。」

「……。」
「白上さーん？」
「……。」
どうやら少しやり過ぎてしまったようで、家に送るまでしばらく口を聞いてくれなかった。オイオイ完全に拗ねちまったよ。なんなら早歩きで俺を置いて行こうとしてるようだったが、残念ながら置いてかれるなんてことはない。
「じゃあお嬢様の護衛任務も終わったことだし、俺も帰るわ。……んおっ？」
フブキを家に送り届けたので俺も帰ろうとすると制服の裾を引っ張られる。引っ張っている張本人は、俯いた顔を少し上げて多少マシになった赤い顔を見せるとはにかんで笑った。
「……杏君。また、明日ね。」
「……あぁ。また明日。」
右手でフブキの頭をポンポンと優しく叩き、緩んだ顔を見られないように足早にその場から去る。とんでもなく破壊力のある仕返しをされたなぁ。
（名前で呼ばれるの、なんかむず痒くて慣れんわ……。）
何？顔が赤いって？バッカお前、ちげぇよ。
夕陽に照らされてそう見えるだけだ。これは。